

調査資料 54

パラグアイ移住地管理問題について

昭和40年11月

海外移住事業団



国際協力事業団

受入 月日	'84. 8. 20	708
登録No.	13288	23.4
		EM

○ は し が き

この度、旧移住振興会社パラグアイ支部において活躍された（故）松元哲一氏が、かつて日系パラグアイ新聞に寄稿した“移住者に対する挨拶”及び“移住地の論理と現実”と題する論文を上梓することになった。

前者は、故人がエンカルナシオン事業所長として赴任した際、所長としての所信を披瀝したものであり、後者は、移住地管理上の具体的問題点を取りあげ、巧みにユーモアを織りまぜながら明快に解説を加えたものである。氏が赴任した当時（昭和36年～38年）は、当事業所管轄下の移住地が、入植後漸く軌道に乗りつつある時期で種々問題が惹起されていた。



松元哲一氏 略歴

鹿児島県出身、旧制七高、京大法卒
昭和30年、海外移住振興株式会社
入社、サンタ・クルス事務所長、
アスンシオン支店次長、エンカルナ
シオン事業所長、事業団総務課調査
役
昭和39年12月没、享年49才

氏は、卓越した識見と豊かな経験とをもって積極的に移住地の諸問題の解決にあたり、多くの業績を残したのであるが、移住地の完成発展を俟たず、病に倒れ、遂に39年暮、不帰の客となった。洵に、事業団の将来のためにも、又、私達後進の指導のためにも、惜しみて余りある人材であった。

この稿を上梓し、事業団職員並びに移住関係者に配布するに当り、衷心より氏の冥福を祈るとともに、御遺族の御発展を乞い願うものである。

昭和40年11月10日

JICA LIBRARY

企画調査課



1028803[3]

尊敬する松元さんの靈に寄せて

週刊バラグアイ新聞社

石 黒 富 雄

松元さんの御逝去を知ったのは2月の末頃でした。バラグアイ御在任当時辱知を得ました1人と致しまして哀惜一入であります。

バラグアイ移住に於て海協連や移住振興会社などの職員の功績は少なくありませんでしたが、松元さん程移住地の人々から敬慕された人はありませんでした。

博学と諧謔、生来の庶民的な生活態度などなど、出先職員と云うと移住地に於ける「特権階級」として権力を傘に着て、自からの「無能」を覆いかくすためにかなり乱暴な行為をしたものであります。

松元さんは「移住地の論理と現実」にも、明かにしております様に移住地の特殊性を十分加味し、「創造社会」への確固たる定見を持っていられた。

松元さんがアスンシオン支店次長からエンカルナシオン所長に就任された当時、移住地内には幾つかの「困難な問題」がありました。

松元さんは「現実と理論」の精神で処理されたことは誠に立派であったと考えます。

もともと健康体でなかった松元さんの健康は移住地現場の激務のため、この頃から病勢を進行させたものと私どもは聞いております。

家族を東京に残しての単身現地勤務は精神的、肉体的にも不自由な移住地であって大変無理を重ねられたものと考えられます。

中々うるさい移住地のことで、その行政は困難なことであります。従って無能無学の人達は移住地の脅迫的ムードや地区毎の騒然たる有様に手の着けようもなく「唯茫然自失」の如く為すことを知らずという有様に見えました。

そしてやっている仕事は、その場限りの「ぶっつけ仕事」に終わり、2、3年で移住地を去って行くのが通常の姿であります。

松元さんは「新聞」を利用し自からの確固たる考えを移住地始め多くの読者に明かにしました。

心ある読者はこれを十分にそしゃくして現実を踏みしめた移住地の在り方に希望と理想を見出しました。

現在も過去も新聞に「タカレル」出先は有りますが、新聞を移住地行政に利用しその方向を明かにした人々は松元さんだけでありました。

松元さんとして1個の人間であり、多少の「ミス」もありました。しかし、そのことが聊かも松元さんの残した業績や、その人格に及ぼすものでないことは多くの人々の一致した見解であります。今静かに考えますに全く数少ない優れた「移住地行政マン」を失ったことを日本移住の従来に結びつけて惜しんでも余りある心地であります。

今度当時の「ブラグアイ新聞」に執筆の松元さんの遺稿を上梓されることを聞きまして、一筆を寄せるものであります。

願わくば松元さんの霊よ天上に安らえ賜え！

あなたの一身、一家を犠牲にしての移住地初期の建設が幾多苦難の過程を経ても、今立派にはこんでおりますことを謹じて御報告致します。

以 上

挨拶をかねて

松元 哲一

移住者の皆さん

私はこの度、エンカルナシオン事業所長として着任し、移住地建設の御世話とかお手伝いをする事になりました。今後何卒よろしく御願い申し上げます。私はこのエンカルナシオン市に赴任するまでアスンシオン市に概ね、1年余り居りパラグアイの国内各移住地全般の問題と取り組むと共に、時々、フラム、チャベス、アルトパラナ等にもまいりましたので、皆様方のことについても大体の知識はもっているつもりであります。御承知の通り新しい移住地の建設は、血と汗の努力を要する仕事であり、皆様方の御苦勞は大変なものであります。また、このパラグアイの大集団移住地の建設は、日本の歴史初まって以来の出来ごとでありますから、皆様方はもとより関係機関の辛苦も大変なものであります。然しいかなる困難があろうともお互にこの仕事は総力をあげて推し進めていかなければなりません。私は着任に当り次のことを申し上げ皆様方の御協力を御願い致したいと思っております。

1. 「移住地の建設には資本と同時に移住地の体制の問題があること」

よく資本さえあれば即ち、融資や補助金さえふんだんにあれば移住地は発展するよう云われておりますが、勿論資本形成は必要条件であるに違いありませんが、それだけで十分とは云えません。戦後独立した群小諸国家や後進諸国では、如何に米国、その他の国が融資や贈与による資金援助を行っても、それらの国の政治体制が整っておらない限り資金の吸収力に乏しく、投下された莫大な資本も所期の効果を発揮することが出来ません。同様に、移住地に於てもそれぞれの単協、連合会の体制の問題が必要であると思ひます。移住者→単協→連合会、と、体制は既に関係機関の間に確立された方針であ

ります。従ってこの体制の強化促進を通じ補助金や当座融資と相俟って、この大集団移住地の運営はスムーズに行くものと信じております。勿論単協や連合会の運営は、民主的な多数決の原理により行われている訳でありますから、一部反対の少数意見のあることも事実であります。

私どもとしては、この多数決の取り決めは一応も二応も尊重しなければなりません。同時に一部反対意見も参考にしなければなりません。私達は個人的興味本位に少数意見を支持することは、移住地を混乱させるものとなりますので、この点は公人として厳に慎まなければなりません。元来構成員と云うものは、自己の属する団体の執行部の悪口と批判を云いたがるものであります。これは社会心理学の問題でありますので、その道の専門家により解明をまつ外はありません。何れにせよ、単協及び連合会の幹部は、このことをよく承知されて、その直接・間接の構成員である移住者各位に単協、連合会の内容を理解させるよう努力して欲しいものです。

このことは単協や農協連の幹部の方に呉々も御願いたい点であります。またこの体制の問題に関連して申し上げたいことは、元来単協や農協連は、移住者のために存在するものであります。然し単協も農協連も、それぞれ組織をもつ有機体として自己の意思をもっております。従ってたとえ長期的には、単協や農協連の利益は移住者の利益と合致すべきものであります。短期的に見れば必ずしも全部の移住者の利益と一致しないことは、往々にしてあり得るわけであります。

移住者各位におかれてもこの辺の理解の仕方が大切だと思います。

2. 「移住関係機関の協力について」

海協連と当社は、それぞれ別個の機関でありその事業分野も異っております。然し第1線の現場にあっては両者を引離しては考えられない問題が多いわけであります。机上で観念的に業務分野を明確に区別して文字に表わすことは、いとも簡単なことであります。それでは事実動いて行けない問題が

多いわけでありませぬ。机上で観念的に業務分野を明確に区別して文字に表わすことは、いとも簡単なことではありませぬが、それでは事実動いて行けない問題が多いわけでありませぬ。現場で働く私達は、そのような無国籍的な分類学ばかりに従うわけには参りませぬ。相互に自主性ばかり主張して所管争いをするのは、子供の議論であり、迷惑するのは移住者各位でありませぬ。私達は常に移住者の定着、安定、並に移住地の発展ということ念願において、相互に相手の立場を尊重し理解し合うよう努力することが必要でありませぬ。営農指導の問題にしろ、組合指導の問題にせよ、又治安の問題にせよ、第1義的に海協連の問題でありませぬが、皆手不足の人員でギリギリの仕事をしているわけでありませぬから、当社としても持てる知識、もてる人力一切を挙げて海協連に協力して行くことが必要でありませぬ。

相手の立場を無視し、自分勝手なことばかり云っているのは、「横車」と云うものであり、自主性でも何でもありません。お互いが女風呂を覗く様な低級な趣味で、他人の恥部ばかりあげつらうては、物事は混乱、秩序は乱れるばかりでありませぬ。高い次元に立って相手の立場も十分に理解して協力して行く事が大切でありませぬ。私達は自分の背だけだけで物事を考え、自分だけが正しいと思ひこんで無免許運転をやり、無軌道に暴走してはとんでもないことになりませぬ。

協力とか、互譲の精神は人間の美德であると同時に組織で働く社会としてのモラルでありませぬ。

3. 申し上げたいことは沢山ありますが、今後遂次「移住地を見る目」と題してバラグァイ新聞に連載することに致しませぬ。

「移住地を見る眼」

(61.11.21)

パラグアイ新聞の求めにより「移住地を見る眼」と題して連載することに致します。然し何も新奇なことを申し上げるのではなく、移住者各位や移住機関の方々の間で平素から論ぜられ、かつ考えられていることを漫談的に整理して見たいとの気持ちに基くものであります。勿論私は学究の徒ではなく、移住会社の社員と云う一實際家に過ぎませんから、高遠な理論を説く資格も能力もないわけでありまして。従って各位の御批判を仰ぎつつ自分の考えをよりよいものに高めて行きたいと思っております。

以下に私の申し上げることが何等かの問題提起の役を果し得るならば、私の望外の幸とするところであります。

(1) 開拓自営農と企業家精神について

開拓自営農とは何か、と聞かれて「ブラジル式の雇用農でも分益農でもないもの」と答える人があります。又「自分の責任で地主として営農を行うもの」と定義づける人もあります。

前者は、男とは女でない者と云うに等しく、後者は、単なる言葉の云い替えに過ぎません。これでは開拓自営農の意味は何ら明らかにされていないわけでありまして。いろいろの解釈があると思いますが、私は開拓自営農とは、小さいながらも一つの企業農家として考えて行くべきものではないかと思うのであります。

より厳密には「パラグアイ開拓自営農は先づ、25町歩乃至20町歩単位のロッテを基礎にして将来の企業農家としての完成を目的とするもの」といいたいのであります。即ち入植後の端緒的な時期に於ける実態は必ずしも企業農家の条件を満足しているとは云えないが、その精神とねらいはあくまでも企業農家として考えて行きたかったのであります。

日本内地の農業は、御承知の通り、1戸当り耕地面積の平均が僅か八反で、

いわゆる小農生産構造と呼ばれる零細農家型であります。

これに比べるとパラグアイの1ロッテの25町歩乃至30町歩という面積は比較にならない程の広い土地であります。

そこでこのロッテの営農はどんな型で行なわれているかを考える必要があります。

移住地の開拓を文学的に表現すれば「自らのひたいに汗して千古の原始林にいどむ」という事になりましょうが、しかし現実の問題としては色々の事があります。

たとえば、極めて限られた少数の人々を除いては、原始林の伐開作業や作付なども、ペオンの他人労働に頼らなければ体力的にも時間的にも困難であります。

また1ロッテの経営資本全部を自己資金で賄うことも大部分の人には無理が伴います。そこには必然的に移住会社の投融資が問題になります。即ち、先づ他人労働と他人資本に対する依存率の高いことが、日本の小農生産構造と違うところであります。また永年作物の種類を選別、作付面積の按配とその年次的な配分、人力から畜力、更に機械力へと漸次的に変形してゆく生産手段の入手等々を考えてみたら、1ロッテの経営には相当の頭脳と経営能力を必要とします。

端的に云えば、すぐれて旺盛な企業家精神が要請される訳であります。

日本の八反百姓の場合は、「働く意志と働く能力」があれば、兼業所得と合わせて一応は食ってゆける訳であります。

又、この働く意思と能力が完全燃焼する所に、小農生産構造下に於けるいわゆる日本型の篤農家が生れて来ます。

然し、パラグアイの開拓自営農の場合は「働く意志と働く能力」の他に今一つ、「経営者としての企業家精神」を必要とします。お隣のブラジルでは、いわゆる「カボクロ化」した日本人のことがよく話題になります。

カボクロとは、意識すれば「漫性的農村プロレタリアート」とでも申しま

しょうか、とにかく日本人移住者でありながら、全く発展への意欲を失ってその日暮しの裸足の現地人化した貧農のことです。パラグアイでも現地人同様の貧農生活とマンジョカ文化に甘んずるのであれば、5町歩以下の耕地面積でもこと足りると云われております。

然しそれでは、一体何のために父祖伝来の土地を離れてこの国に移住してきたのか判らないことになります。

またこれでは、パラグアイ政府が優秀な日本人農民を入れてこの国の農業生産の開発をはかりたいという趣旨にもならないことになります。蓋し日本の小農生活構造下の農村において金持になることは夢であります。否、その夢すら抱けないでひたすら他人の足を踏まない様に気を配って、黙って猫のひたい程の土地を耕さなければならないのがきびしい現実であります。

然し開拓自営移住者は、外国に於て無限の富を追求することが可能であります。それに繰り返して申し上げますが、働く意志と働く能力の他にすぐれて旺盛な企業家精神を必要とします。この企業農家に依り、直接的に或は間接的に構成されるパラグアイ移住地の単協や、農協連のあり方も、日本の零細農家の構成するそれとは本質的に異なるものがあります。ブラジルの邦人は、コチア産組のことをよくコチア株式会社と云って批判したり非難したりしております。それは、コチア産組があまり企業家的に過ぎるといふ悪口です。然し人口300万以上のサンパウロという大消費の都市を中心にした、大小の企業の農家を構成員とするコチア産組のあり方は、株式会社的にならざるを得ない面があるのではないかと考えられます。

もちろん、ブラジルの農業協同組合法からいえば、或は、行き過ぎもあるかと思いますが、コチア産業の経済的本質論からいえば、私はこの非難に対しては極めて懐疑的であります。パラグアイの協同組合法も、1戸当り最低保存面積25町歩乃至30町歩の日本人企業農家の大集団移住地を想定したものでない筈です。従って現実の単協や農協連の運営に当っては、法の正面からの適用に無理がある場合もあるかと思えます。

私達移住機関に働く者は、日本人の目で移住地の発展を温かに見守ってゆくべきであります。私達は、この国の農牧省のお役人の眼で見た法律論だけで組合や農協連のあり方を批判したり、或は犬糞的なあげ足取りをしたりすることは慎むべきであると思います。

私の云いたいのは、単協や農協連の幹部は、この大集団移住地を引張ってゆくためにはこの国の協同組合の趣旨を体しつつもっと旺盛な企業家精神を発揮してもらいたいということです。勿論私がいう企業家精神とは、小商人的な目先の金儲けを目的とするマーチャント精神ではないことを理解して頂きたいと思います。

アメリカ合衆国の今日のあのすばらしい発展も、日本の明治維新以来の大発展も、また、世界の驚異ともいっている日本の戦後のあの急速な経済成長も一面から見れば、ほんの一握りの企業家の旺盛な企業意欲によるものといえましょう。

資本主義経済発展の要因は、いろいろ考えられますが、この根底をなすものは、企業家の投資意欲だと思えます。如何に天才的な発明が行われても、それを経営に取り入れる投資を行わない限り、単に科学の発展に留り、技術革新とは云えないのであります。

よく単協や農協連の幹部が企業的に走りすぎると非難する人があります。

私をして云わしむれば、全くの日本内地的な常識論か或は、感情論にすぎないと思います。

勿論その企業家精神とは、移住地の人口や色々の生産力等に応じた釣合いの取れたそれを云うのであり、素頓狂な計画は企業家精神の埒外の問題であります。南米の後進國中の後進国といわれるこのパラグアイは、社会的な分業が進んでいないので、移住者はこの国の施策や民間の施設に頼ることは出来ません。何もかも移住者が自前でやっていかなければなりませんから、単協の幹部の責任も重大であります。

単協や農協連の執行部に私が望みたいことは、神様や仏様みたいな人格だ

けでなく、移住地を引張ってゆく経営者としての企業家精神であります。最後に申し上げたいことは、自営開拓農を企業農家として把握する限り、日本に於ける農業経験だけが、唯一の資格ではないという事であります。

企業家精神の旺盛なところ都市出身の方であろうと、炭坑出身の方であろうと、経験者として立派に成功されることは断言してはばからないところであります。

企業家精神の如何に応じ今後5年10年たてば、たとえ、土地や労働の生産性や資本力が同じであっても移住地に於ける階層分化は、回避出来ない事実として現われてくる事を御承知願いたいのであります。

(2) 市場問題の以前にあるもの

移住者の皆さんにとって何よりの関心事は、作ったものが果して売れるかどうかという事であると思います。生産者である移住者各位が、パラグアイ移住地の市場問題を心配するのは当然の事であります。

私の知る限りに於ては、この市場問題について悲観、楽観双方の説が横行しているようです。それでは一体、パラグアイ移住地の市場問題はどの様に見てゆくべきでしょうか。私達は、風が吹けば桶屋が儲かる式のこじつけ話や耳学問だけでなく、今少しはパラグアイ移住の市場問題について理詰めの考え方を必要とすると思います。市場問題は純粋な経済問題です。そこにはおまじないみたいな非合理的な迷信や伝説の存在は許されません。従って本項に関する私の説明は問題の本質上いくら教科書的にならざるを得ないのであります。

先づ、市場問題とは何でしょう。それは現実にお金を持って物を買ってくれる購売力の場所的な広がりであるといえましょう。別の言葉で云えば、有効需要のことであります。

或る国の有効需要とは、(1)産業投資、(2)政府の財政支出、(3)民間消費、(4)輸出、の4つであります。

パラグアイ国の産業投資についての統計数字は今私の手許にありませんが、

パンコ・セントラルの経済研究所に行けばすぐわかります。いづれにしても現況では大した金額ではない筈です。御承知の通りパラグアイは人口170万の小さな後進国です。この国の年々の予算は日本金の70億円位のものであります。70億円といえば日本の小さな県か中都市の予算ぐらいなものでしょう。

従ってこの国の政府の財政支出による有効需要は、地方財政を含めても全く知れたものです。またパラグアイ国の国民所得は、1959年度で2億ドル見当で1人当たり1年の平均所得僅か117ドルであります。民間の所得は、一部は貯蓄され残りが消費にまわる訳であります。

従ってパラグアイ国全体の民間の消費といってもその額は大したものではありません。

この様に見て来ますと、この国の国内の有効需要は知れたものです。一方この国の年間輸出は、大体3000万ドル位なものです。これは僅かな金額ですが、この事については輸出適格品さえあれば、相手国が買ってくれる有効需要ですから考え様によっては今後無限の広がりをもつ有効需要であるといえましょう。他の言葉でいえば、パラグアイ国に於ては当分の間は国内市場に期待するのは無理であるが、輸出市場だけは努力して適格品を作りさえすれば聊かも悲観することはないということです。従ってパラグアイ移住地の営農計画に当たっても、ツング・セルバ等の輸出向けの永年作物がその中軸の永年作物とならなければならないことは当然の帰結であります。

その他短期作物のミス、大豆、棉花、ヒマ等何れも輸出作物であります。

営農計画が内需をもとにしなければならないという理屈はなにもない訳であります。また輸出作物を中心にしていてからとして、なにもおかしい事はない訳であります。然し国内市場がぜんぜん期待出来ないというのではありません。

新年の御挨拶にかえて

(1) 脱 耕 者

移住問題を扱っていて私が一番嫌いなのは、脱耕者という言葉を知りたり読んだりする事です。脱という字は、脱獄、脱走、脱法、脱税という様に余りいい感を受けません。文字などどうでもいいと云う人もあります。然し移民と云うのと移住者と云うのではニュアンスの上でも内容の上でも相当の差があると思います。違いはないと云うのはその人の文学感覚や言語感覚のきめが荒っぽいからではないでしょうか。たとえ同じことを表現するにしても綺麗な言葉や上品な言葉があれば、それを使った方が気持ちが良いでしょう。例えば、日本語で女性の性器を意味する言葉は幾つもあります。若し、話の都合でそれを口にしなければならない時は、誰でも、その内で最も品の落ちない単語を使用するのが健全な常識と云うものでしょう。

脱耕者と云う言葉から受ける印象はみそもくそも一緒くたにして移住地を監獄扱いした棄民思想の名残りが感ぜられます。そこには一片のヒューマニズムも感ぜられません。中には計画的に移住地を出た人もあるでしょうが、個々の事情を調べていけば病気や家長の不幸や構成家族のもめごとその他、いろいろの原因があると思います。集団移住地に於ける百パーセントの歩留りは理想であり、最も望ましいことでもあります。然し理想を追うのあまり、不幸な人に同情する心のゆとりを失ってはならないと思います。

私は脱耕者という言葉を使用したくないと思います。退耕者とか離村者とかもっと上品な言葉はないものでしょうか。

(2) 点数かせぎ

女中さんの給料は国民所得に算入されるが、その女中さんが、そのままそこに御主人の妻になり、而も同じ仕事をしていても妻は無所得者として扱われます。これは経済学者が国民所得統計の矛盾の例として好んで用いる説明方法です。経済学の理論の展開は、学者の仕事でありますから我々素人には

余り興味のない事です。然し右の例の場合でも他の面より見れば、女中さんの心理状態と妻の気持との間には大きな違いがあります。女中さんは女中さんである限り雇われ人であり、御主人に対して経済上の打算があります。然し妻にはその打算はない筈です。ましてやその妻に赤ちゃんが出来て母親ともなれば、彼女は純粹な母性愛に生きてゆきます。私のいいたい事は、移住機関に働く我々は、たとえ会社の雇われ人ではあっても打算のない母親の気持で仕事をしたいと云うことです。

資本主義社会のしくみが個人の利己心に訴えて効果をあげてゆくことにあ
る以上、もともと個人の打算を前提にしたものです。別の言葉で云えば、点
数かせぎをしなければならぬ様なメカニズムになっている訳です。よく点
数をかせいだ者ほど月給も早く上がり、ボーナスも余分にもらえると云う事
になります。然し私達の仕事が移住地の造成や、新しい村造りや、新しい集
団社会の建設にある以上、この点数かせぎ根性だけでは決してすまされな
いものがあります。

そこには未来に対する大きな理想と夢と情熱とがなければなりません。難
かしい問題ですが、一番大事な問題だと思っております。

(3) ものわかり

世の中にはいろんな人がいます。(イ)頭が良くてものわかりのいい人、
(ロ)頭が良くて、ものわかりの悪い人、(ハ)頭がそんなによくないがものわ
かりのいい人、(ニ)頭もよくないがものわかりも悪い人、です。頭がよくて
ものわかりのいい人であるのに越したことはありませんが、もって生れた頭
は如何とも致し難く、今更親を恨む訳にも参りません。移住機関に働く私達
は頭はよくなくても、ものわかりのいい人間でなければならぬと思います。

(4) ストイシズム

ストイシズムとはギリシャの何とか云う哲学者のとなえた禁欲主義のこと
であります。これを狭義に解して変な意味にとる人もありますが、本当の意
味は自分自身に対して戒律的なきびしきを持つ、武士道的精神だと思いま
す。

それは古い型の日本的性格の中にいくらかでも発見する事が出来ます。

また若い純真な共産主義の信者の中にも、この日本的ストイシズムが感ぜられます。このストイシズムは、近代的な功利主義とは相容れないものであり、日本の都会地では明治の中期を境にして殆んど消滅したかに見受けられます。然し時代差は地域差の中に見出すことが出来るので、日本でも比較のおくれた地方にはまだまだこの日本的性格がたぶんに残っています。九州の中南部とか、四国とか、東北とか、或は本州の僻地とかがそうです。移住者の中には私達に対して非常に激しい態度で物を云ったり、要請したりする人が多い様です。而もその人達は移住地のにない手として、自分自身は極めて厳正な私生活を送り、中には自分の家庭を犠牲にして集団のために尽している人もいる訳です。

移住者の大部分が、前記の郷土色の強い後進地帯の出身であることを考えると、移住地の特殊心理とだけでは片づけられないものがあります。私は移住地の中に古い日本的性格のストイシズムが生きていることを発見して、却って郷愁に似た感情をさえ覚えます。これは私が日本で最も封建的と云われる九州の最南端の僻地に生まれ、そこで育ったせいでしょうか。然し、このストイシズムと似て非なるものに精神的露出症があります。それは自分自身は極端な自己中心のエゴイストでありながら、他人を責めることにのみ異常な快感を覚える人です。そんな人は、自分で思ったことは人中で遠慮会釈なく発言するのが一番正義の道にかなっていると誤信している訳です。これは社会人としてのモラルに何か一本抜けている精神的露出症であります。こんな人に接すると私は肉体的露出症を見つけられた時と同様に、人づてに聞く売春婦の腋臭にも似た獸的な不潔感におそわれます。

(5) マンジョカとサツマ芋

或る日、或る時、或る場所での視察者との対談です。

彼「移住者は旺盛な開拓精神を以て困苦欠乏に耐え早く現地人に同化して、米など忘れてマンジョカを常食とすべきだ。」

私「あなたは自分でマンジョカを食べた事がありますか？ うまいと思いましたか？」

彼「今度移住地で始めて食べたが中々うまい」

私「たまに食べたなら私達もうまいと思います。然し、日本人には嗜好の点からも、カロリーの点からも毎日マンジョカを食べるのは無理でしょう。やっぱり米でなければならぬと思います。

彼「そんなたるんだ精神じゃあかん。日本では鹿児島島の奴等は昔から芋ばかり食って飽きなかったそうじゃないか、而もその芋腹で明治の御維新をやりとげる底力があつたんじゃないか。移住者も米など忘れて早くパラグアイに同化して、マンジョカ食って頑張らにゃ。要は精神力の問題じゃ。アーン」

私「ちょっと待って下さい。えらい失礼な話を承りますが、私は鹿児島県生れの鹿児島県育ちです。鹿児島島の奴等とはとんだ御挨拶ですね。あなたは鹿児島島の連中がなぜ芋ばかり食っていたかそもその由来を御存知なのですか。」

彼「失言は取り消します。それでは鹿児島の方々の方が芋を食べておられた理由をお話し願えませんか。」

私「昔、サツマの国は近衛家の荘園でした。それを鎌倉に幕府を開いた頼朝が、自分の妾の子をサツマの守護に任命し、事実上近衛家からその領地を奪ってしまいました。その後700年、サツマの国は島津の殿様が万世一系の如く連綿としてつづきました。そしてサムライ達はお国替えによる失業も敗戦による帰農も殆んど体験しませんでした。いやむしろサムライの数はだんだん増えるばかりでした。徳川の末期になるとサツマ藩の全人口の40%がサムライ階級で54%が農民で6%が商工業その他でした。

即ちこの54%のお百姓が40%の軍人と官僚を養わなければなりません。これではたまったものではありません。サムライ達の月給はお米で支払わなければならないので、しばしば月給の遅配、欠配がつづきました。そこでサツマ藩の国税庁長官と食糧庁長官が相談して百姓達に芋の

徹底的な増産を命令し、而も百姓にはその芋の常食を強制し、米は殆んど税金として供出させる事にしました。弱い百姓は泣く子と地頭には勝てませんでした。またサムライ内でも月給の安い属官クラスは芋を主食にして生活を維持しました。

彼「いやよくわかりました。」

私「もっと聞いて下さい。一方サツマ藩の通産官僚はこの供出された余分のお米や、離れ島の黒砂糖を大阪や江戸に移出して大いにかせぎました。また琉球を仲介地として中国との密貿易を行ない、外貨獲得をはかりました。こうして儲けたお金で軍隊の装備を近代化して兵隊をふやし、やがて幕府といくさを始めました。

彼「もういいです。よくわかりました」

私「いや、私の申し上げたいのはサツマ藩の歴史やイモ談義ではなく、移住者は何でも現地人と同化せよとおっしゃるあなたの考え方についてです。勿論よそさまの国に来た以上、言葉や、風俗習慣に早く習熟しなければなりません。

同時に日本のすぐれた点や高い文化は、あくまでも維持してこの国に伝えるだけの誇りと自覚を持つべきだと思います。パラグアイでもブラジルでもボリビアでも米の消費量は年々ふえています。これに逆行して何故日本人がマンジョカ食ってパラグアイの貧農の食生活に同化しなければならないのでしょうか。米を作れる所には米を作り、うんと食べてうんと働けばよいのです。文化とは何も庶民と進歩の味方と自称する大学の先生や、評論家の説くように難かしいものではない筈です。カロリーの高いおいしい米を上手に作るのも日本の文化です。便所に行ったあとで必ず手を洗うのも日本人の父祖伝来の清潔な文化です。毎日でも風呂に入って身体を淨めるのもそうです。私達の生活の古典の中にはよその国に伝えても恥しくない立派な文化がいくらかでもあります。昔みたいな楽民だったら、この国に住ませて頂くと云う気持で身も魂も同化せよ、と説くのも或いはよかったかも

わかりません。然し戦後の自覚移住者は決して棄民ではありません。移住協定に基づいてこの国の農業開発を行なう経済協力の戦士であります。日本のすぐれた文化を捨ててしまつては、この国の産業開発も出来ないでしょう。移住者は卑屈な精神でなく、立派な日本文化のにない手としての自覚を持ってこの国に同化することを考えなければなりません。今後の子弟の教育の問題も日本語教育の問題も、立派な日本文化の伝承者としての日系パラグアイ人を育てあげて行くと言ふ立場から見直す必要があるのではないのでしょうか。日本の遠い昔の王朝時代をふり返つて見ましょう。あの頃は大陸の政治亡命者達が一族一党を引きつれて続々と日本に集団移住をして参りました。彼等は日本に農業土木の技術や美術工芸や学問やその他いろいろの高い文化をもたらし、日本の文化水準を急激に引き上げてくれました。即ち、彼等は日本の風俗には短期間に同化しましたが、日本人の方では逆に彼等の高い文化に同化されてしまったということです。私達移住機関に働く者は、この点をよく考えるべきだと思います。馬鹿の一つおぼえみたいに、みそくそも一緒にくたにして、同化同化とお題目みたいになえる時期は過ぎ去つたのではないのでしょうか。」

彼「いや、よくわかりました。私も日本の移住問題のありかたをもう一度よく反省してみましよう。」

(2) 市場問題の以前にあるもの

価格変動は何も国際商品に限つたことではなく、国内商品についても同様であります。

この事は雑豆の経験で移住者各位が誰よりもよく御承知の筈であります。また価格変動は農産物の場合だけではなく鉱工業製品の場合でも全く同じであります。とかく我々日本人は教育程度の高いせい、もの知りでありすぎます。かたよつた知識過剰は煩惱のもとであり、却つて迷を生じます。ツングにしても中国がダンピングを始めたら、国際価格は瞬時にして暴落するとの

話が数年前からまことしやかに伝わっております。なるほど中国は昔からツングの産地であり、その産額は世界市場の王座を占めています。然し、共産革命後の中国は急速な工業化を進めています。自分のところでもツングの乾性油は相当な需要があり、また今後ともその需要はふえる一方でしょう。中国は昔から地大物伝の中華の地とうぬぼれていますが、本当のところは石炭、鉄鉱、満州大豆、油桐その他を除いては見るべき資源のない国です。外国からの借款による中国の莫大な開発資金の見返りになるものは、これらの産物が主たるものとなりましょう。

中国の生産統計は秘密で外部に発表されておりませんが、はたして中共が油桐をダンピングする余裕があるか甚だ疑問です。一方アメリカ合衆国は毎年ツングを増植しつつあります。それでも油桐の需要は追いつかず、外国から輸入しております。要するに国の場合にせよ、移住地の場合にせよ、経済の発展とは、需要と供給の不調和的な拡大であります。不調和的であるからこそ多くの場合には需要の均整がとれないで、価格の変動が起り、ひどい時には恐慌が起ったりします。勿論そんな事がないに越した事はありませんが、見えざる手によって支配される資本主義経済なのです。

最近に至って、見える数字を用いた財政金融政策の運営により、景気のコントロールが行なわれる様になりましたが、完璧を望むことは不可能です。

従って移住地だけが生産物の価格変動から逃れることは絶対に出来ない相談であります。

問題は、移住地経済の発展が需要と供給の不調和的な拡大であるとしても、我々は果して何れの側に重点を置いて考えるか、ということです。勿論その時によってある場合は供給が大事であります。原理的に云えば資金不足の後進国では供給面に、資本蓄積の進んだ先進国では需要面に重点が置かるべきであります。その経済的理論的説明は省略します。

従って、バラグアイ国の様な後進国ではまず供給面の充実ということが先決問題となります。然し、我々日本人はとかく需要面だけにこだわって物を

作る前から「売れるか売れないか、ゼニになるかどうか。」という事のみ考え勝ちです。勿論、それも必要ですが、余りにも取越し苦勞が多すぎる様です。

日本人が、何故に、明日のゼニを欲するかには、それ相当の理由もありましょう。長い歴史を通して、日本の国民の大部分が余りに貧しかったことも、一半の理由でありましょう。要は、物を持たずに商いは出来ないという事です。

この事に関連して、近くのドイツ系植民地 オヘナウ、オブリガード、ベジャビスタ、カビスタン・メッサを見ましょう。

彼等は、ツングとゼルバの永年作物を中心に、食用作物や飼料作物を作りつつ牛を飼い、まづ自給体制の確立をはかります。即ち、彼等は我々日本人と違い、すぐ明日のゼニになる事を考えません。民族の違いという事もありましょうが、それだけでは日独植民地の内容分析についての第一次接近にすぎず問題の回答は出て参りません。これを経済的に追跡してゆけば、要するに彼等は、移住地の経営に際し、需要面よりも供給面に重点をおいて考えているという事です。これは、先日申し上げた、後進国に於ける経済発展の原理によく適合しているというべきであります。勿論、供給面といっても、何でもかんでも無計画に作れというわけではありません。

彼等は、大局的な立場から、長期的有効需要の見通しを立て、それに従って、ドイツ人特有の計画性と合目的にそいつつ、強引に、且つ、黙々として供給力の充実に努めているという事です。

この点、我々日本人は、経済の理想に合致したドイツ人の営農方針に学ぶべきところがあると思います。

結論的に云えば、後進国に於ては「供給は、それ自からの需要を作り出す」という古典的な経済原則が多分に適用する、という事が必要である事を承知しておくべきであります。

ここは、経済論を説く教室ではありませんから、このくわしい説明は他日に譲ります。

他の一例を申し上げるなら、サンパウロ近郊の日本人が、馬鈴薯、トマト、鶏卵、果物その他、多くの野菜類を年間大量に増産しつつ、今日の富をなしたのは、市民の食生活の変革ということもあります。しかし、つきつめてゆけば、「後進国に於ては、供給はそれ自らの需要を作り出す。」という経済原則が実証されていると見るべきでしょう。また、この経済原則と同時に考えなければならぬ事は、「資源のある所には、資金が集って来る」という経験的事実であります。

移住地にツング、セルバが作り出されたならば、移住会社の資本も当然それらの加工施設や、精製設備等に参加することになります。

移住会社が、工場を作る確約をするなら、ツング、セルバを作付するというのも、1つの理屈であります。しかし、それより大事な先決問題は、資本を吸収する資金を作りあげることにあるのではないのでしょうか。

フラム移住地に、大豆を作ったからこそ、日本が買付けるのであり、日本が買付ける確約をしたから大豆を作ったわけではありません。要するに、資源のあるところには、移住会社の設備投資だけでなく、日本や外国の商社資本も集って来るという事です。

サラリーマンが、月給をあげてくれるなら一生懸命働くが、そうでなければ働かない、というのと若干似かよった話です。

労働組合の戦術論は別として、本質的には真面目に働くからこそ月給が上がるのであって、働かなければ、元も子も失ってしまうでしょう。

勿論、「供給と需要」「資源と資本」がうまく結びついていく迄には、若干の時のおくれがあります。

このむりをなくしたり、短縮したりするには、お互いの協力と努力が必要なことは申すまでもありません。近く、モンテビデオ条約の実施により、近隣諸国との関税の減免も行なわれ、貿易も自由になります。世界の客観情勢は、刻々と動きつつありますから、足元だけ見て、ひとり合点の取越し苦勞はしないことです。それには先づ、落付いてドイツ式に供給面の確立を計ること

が先決問題ではないでしょうか。

背い鳥は、決して国境の彼方のブラジルやアルゼンチンにいてではなく、自らの耕地のツング島の中にいることを承知しておくべきであります。

要は、ドイツ人植民地のあり方を研究しつつ、日本人の御家芸のデザイン盗用精神で、まづ、永年作物を植える事だと思えます。新しいものは、そのうち日本の英知で作り出すとして、今は無難で危険のないデザイン盗用でも結構だと思えます。パラグアイ移住地のマイス、その他の短期作物は、永年作物の収穫開始までのつなぎでありますから、その値段にあまりこだわりすぎて、パラグアイの市場問題を気にならむ必要はないはずで。短期作の収入は、当分食ってゆけば、余剰があれば、次の開発投資にまわしてゆけば、良いくらいに遊観する必要があるのではないのでしょうか。

マイスでお金持ちになることは、始めから無理な話です。本当は、永年作物にある訳です。よその国の短期作専門の収入とつなぎになるパラグアイの短期作の収入を比較して、羨しがったり、心配したりする必要は、少しもないと思えます。

大体、この次元の違う両者を比較する事自体が、意味のないことであり、間違いであります。私はかつて、パラグアイの自営開拓移住者は、企業農家であると申し上げました。日本の自営農という言葉は、小作農に対するそれであり、極めて限定された消費的内容しか持ってありません。

パラグアイの企業農家も、その営農計画がよそのデザイン盗用である時代は或は、迷いも多いかも知れません。しかし、積極的企業農家としての自営と信念を持って、飽く迄も前向きの姿勢で進み、やがて日本人独自の営農計画を生み出して、独自の市場を打ち開いてゆく事を真の開拓精神だと思えます。

最後に、今一度繰り返して申し上げます。パラグアイの様な後進国では、「供給は、それ自らの需要をつくり出す」という古典的経済原則が、広く適用するという事と、「資源のある所に、資本は集る」という経験的事実です。

この2つの事を正しく認識してもらいたいという事です。

(5) 問 答 編 (1)

A 「移住地の組合中心主義の管理のあり方と、今後の方針について承りたい」

答 「私なりの考え方で云えば、移住地の管理には、直接管理、間接管理及び混合管理の3方式があると思います。直接管理とは、組合の有無にかかわらず、直接個々に移住者に直結するやり方です。何百家族という集団移住地では、それは実際問題として不可能です。従って、組合を通ずる間接管理が必要になります。その為には、必然的に組合を強化して、管理の万全を期さなければなりません。

しかし、現在に於ける土地代の回収とか渡航前融資については、直接管理が行なわれております。」

A 「現在は、右の2つが結びついた混合管理ですか。」

答 「そうではないのです。私の云う混合管理とは、右の夫々の短所を除き長所をとり、その2つを混合した事前の計画的な意志的なものをいうのです。現在のあり方は、飽く迄も組合中心の間接管理をもって貫徹され、それに土地代の回収とか渡航前融資とかいう直接管理が、機械的に附着している形です。実際問題として既に、フラム、チャベス地区に於ては、間接管理だけではすまされない問題が、発生しつつあるやに思われます。」

A 「具体的には、どういう事になりますか。」

答 「移住地管理というものは、馬鹿の1つ覚えみたいな固定したものであってはならないと思います。組合中心主義を崩す訳には参りませんが、移住地の発展段階に応じて、漸次混合管理的な方向に向うべきでしょう。入植数年間は、組合員が出来るだけ歩調を合わせて、物質的な発展をしてゆくことが望ましい訳です。

しかし、時が経って来ると、移住者個々の経営能力や家族構成や土地の

生産性や立地条件等に応じて、次第に階層の分化が起り、富める者と、貧しい者が出て来ます。また、土地代を完納した人とそうでない人もあります。これらの点を、いつまでも見て見ぬふりをする訳には参りません。各実行組合や単協についても、夫々格差がついて来ますから、その現実を無視する事は出来ません。即ち、いつまでも移住地の底辺だけを基準にした悪平等は、許されない訳です。

それでは伸びる者も伸びられないし、励みがないわけですからね。融資についても、組合名義役員を保証という線は崩せませんが、その内容が実行組合又は土地代完納者個人となっていくのが、現実に即した混合管理のあり方ではないでしょうか。しかし、その実現がいつであるかは私だけの考えで、言明する訳には参りません。

なお、混合管理への移行について、注意しなければならないのは、直接管理と間接管理の長所だけをとる訳であったのが、下手をすると、その短所だけがでてくるということです。従って、その運営と実務処理には、練達な手腕を必要とします。また、混合管理への移行により、組合を弱体化することは許されませんからね。この点は、誤解のない様願います。」

A 「よくわかりました。この話を承って、私達の将来の営農のありかたについても、独自の構想を描いて行けるとの安心感を頂きました。」

問 答 編 (2)

B 「私は、非組合員です。ブラジルでは、組合員でない個人を対象に、融資が行なわれている事を知っていますが、パラグアイでは、非組合員の立場は全く無視されていると思うが、この点どうですか。」

答 「卒直に申し上げます。移住会社の融資要領より云えば、個人融資の途も禁ぜられている訳ではありません。ブラジルでは、個人融資を行なっている事は事実です。しかし、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア及びパラグアイは、夫々に事情を異にし、移住の歴史も方式も営農形態も異ってお

ります。従って、移住会社の移住地管理や金融のあり方も、夫々、歴史と現状に応じて、違ったものになるのが、当然ではないでしょうか。1つの会社だから、運営面の末端に至るまで、各国共通の一元的なやり方でなければならぬというのは、一種の形式論だと思います。観念的な教条主義だけで、世間がおさまるのであれば、苦勞はいりません。複雑な人間社会というものは、多角的な観察と取り扱ひが必要です。ブラジル移住は、50年の歴史を持っております。従って、企業農家として成功した大小の数々の日本人がおります。この人達個人を対象に、農企業の融資が行なわれるのは、当然のなりゆきです。

又、ブラジル移住は雇用農に始まり、現在もそれに近いものが、中心をなしております。そうすると何年か後には、この人達の独立援助もしなければならぬのです。そこには、当然個人融資という問題が発生します。勿論、組合融資も併存する訳です。

アルゼンチンの場合も、若干これに似た形が出てまいります。ポリビヤのサンファン移住地は、まだ組合中心の段階です。パラグアイ移住地の重点は、戦後の大集団移住の形体であります。従って、これの管理は、関係組合方式による組合中心主義をとらなければ、移住者側も、移住会社側も、全く動きがとれないこととなります。

しかし、それも長期的に見れば、次第に混合管理の形に進み、やがて個人が頭を出して来ます。この組合中心主義の段階にあっては、非組合員に対する金融援助は、組合を弱体化することになり、自己矛盾に陥ります。

即ち、生産物の販売其の他で全く自由な立場にある非組合員を積極的に援助することは、結果的には、組合員の組合脱退を奨励することになり、組合は弱体化します。極端なことを云えば、組合は、空中分解することになります。従って、パラグアイに於ける移住地管理の或る段階にあっては、非情といわれ様と、非組合員の取扱いは、慎重を期さなければならぬのです。御不満とは思いますが、この辺の事情をよく御了解願いたいと思

ます。あなたの御気持はよくわかります。

あなたが、組合を脱退された経緯については、複雑な理由があったとは思いますが、今は組合の情勢も執行部の顔ぶれも、すっかり変わっています。過去の感情は一切水に流し、この際、組合に復帰されたら、あなたの御希望も満たされるのではないのでしょうか。」

B 「おっしゃる事は理屈ではよく解ります。しかし、あの時のことを思うと、感情的というより、むしろ生理的なしこりが残っているのです。」

答 「その説は、一休みしてからゆっくり承りましょう。」

問 答 編 (3)

B 「私が、3年前に組合を脱退した時の経緯は、このメモに詳しく書いてあります。よく読んで下さい。当時の理事会の権力的な横車と、ムリ押しの強制には、全く今もって腹にすえかねるものがあります。」

答 「拝見しましょう。……なるほど……組合脱退には、いろんな事例がありますが、この場合は、あなただけの問題でなく、移住地に於ける組合のありかたについて、研究すべきいろいろな問題を含んでいると思います。第1は、パラグァイ国の産業組合法に則った組合定款によれば、理事会の決議により、組合員を除名できることです。また、除名決議までいなくとも或る種の圧力により、自発的な組合脱退に追込み得ることは、結果的におなじことですね。これでは、物事が上手にいつている間はいいのですが、1歩を誤ると理事会ファシヨ化への途をたどり、実力者独裁への危険をはらんでおります。即ち、理事会の上意討ちという形で、斬捨御免が行なわれ得ることになります。この点、私達も勉強が足りなかったと思いますが、この国の法律をよく研究して、主務官庁である農牧省の意向も聞いてみましょう。

第2は、権力による強制の問題です。この点については、私は、必ずしもあなたの御意見に賛成する訳には参りません。思うに、未開の原始林の

中に新しい1つの村造りを行ない、集団社会を形成してゆくためには、何らかの形による団体的な組織が必要です。

それが、協同組合でなければならぬ、ということはありませんが、今のところ、おおかたの人の意見では、この国の法律に基づいた協同組合が、最も適当だということになっております。しかし、新しい組織による、新しい社会体制の建設には、どうしても強制が必要です。

みんなが、勝手気ままでバラバラでは、処置ないですからね。話は大きさに飛躍する様ですが、ソ連や中国が、新しい共産主義体制を採用した場合の、あの非情きわまる家族ぐるみの強制を考えてみて下さい。しかし、資本制社会の自由世界に於ては、この様な冷酷な強制は許されませんが、団体の組織を維持してゆく為には、やっぱり有形無形の強制が必要です。移住地に於ても、組合の発展と秩序維持の為に、共同販売と共に、共同購買の2つを軸にした強制が必要です。第3は運営面での問題です。日本全国から集まって昨日まで、或は同船するまで見も知りもしなかった赤の他人が、ある特定地域に入植したという因縁だけで組合を作っても、初めからうまくゆく道理はありません。入植後、若干の期間はみんな特殊な心理状態にあって、感情の気流は、必ずしも正常なものではない筈です。この感情の上昇気流や、エアポケットに悩まされつつ、なれない手で組合を操縦していく執行部の苦勞も、察してあげなければならぬと思います。

世間では、よく感情を超越してとか、理性をもってとか、悟り切ったようなことをいいますが、私達みたいな煩惱具足の凡夫の社会は、つまるところは感情で動いているのが本当の姿でしょう。私は、貴方の気持ちも組合の立場もよく理解出来るつもりです。お互に、古傷にさわらずに、さやにおさまるのはどうでしょう。」

B 「解った様な気がします。カーチャンとも相談します。」

問 答 編 (4)

Q 「移住地の生産力、という事がよくとなえられます。常識的にはわかっておりますが、正確にはどう解したら良いのでしょうか。」

答 「大分前ですが、私は、このパラグアイ新聞で、市場問題に関連して有効需要とは、生産投資、財政出資、民間消費及び輸出の4つだと申し上げました。経済問題は、いつも需要と供給の両面から見ていかなければなりません。生産力の問題は、供給面の場で取り上げてゆくべき性質のもので

す。話が少し理詰めになります。一国の供給能力とは、輸入と国内生産の和であります。この国内生産力とは、① 生産設備、② 労働の質と量、③ 社会的間接資本(道路、橋梁、港湾施設等)の3つであります。このことは、最も初歩的な経済学の常識であり、今更私が申し上げるまでもないことかも知れません。従って、移住地の生産力もこの理論に従って、① 生産設備、② 労働の質と量、③ 社会的間接資本、の3つであるとみて差支えないでしょう。具体的に申し上げますと、①の生産設備とは、開発投資に基づく営農施設一切であるといえましょう。即ち、開墾された土地、倉庫、農機具、運搬具、役畜、小動物、永年作物及び短期作物等のすべてを含んだ広義の設備であります。②の労働の質と量とは、自家労力と、他人労力であるベオンの問題になります。③の社会的間接資本とは、移住地内外の道路、橋梁及び港湾施設等であることは申すまでもありません。以上の次第でありますから、純経済問題として、移住地の生産力を論ずる場合は、いつもこの3つを同時に結びつけて、一体のものとして考えなければ、現実的にも理論的にも成り立たない訳です。とかく世間では、移住地の労働問題や道路問題を生産力に随行する、或は、生産力外の問題をして軽く取り扱う傾向がありますが、これはとんでもない間違いです。繰り返して申し上げますが、移住地の生産力とは、飽く迄もこの3つの要素が三位一体となったものを云うのです。しかし、時と場合によって、

この3者に対して、重点の置き方に相違のあることは当然であります。」

○ 「私は、自分の耕地の私的な施設だけを考えていましたので、ベオンや道路が生産力であるとは思っていませんでした。お話を承って、最近のフラムでは、道路の問題が最重点ではないかと思えます。この補修の問題はどう考えたら良いのでしょうか。」

答 「フラム、チャベス地区の道路問題は、目下の緊急案件であることに間違いありません。特に、チャベスD線は、移住地の死命を制する問題です。道路造成は、土地代に含まれているので、当初は移住会社がこれを行いますが、あとの管理は皆さん方の責任です。勿論、経済力の乏しい組合又は、道路委員会に形式的な管理義務を負わせても、中々むつかしい問題が残ります。物事は根本的に解決しないこともよく承知しております。アルトバナに於ても、あの完備した道路の管理には、難かしい問題が予想されます。要は、移住者各位が、道路は生産物の重要な一部であることを理解され、自分の耕地にツングやゼルバを植付けて育てるのと同じ気持で、平素から道路愛護の念に徹して頂くことですね。不断の小修理を積み上げていけば、道路の損傷は大分違って来る筈だと思います。」

4月1日号

D 「このたびの各単協及び連合会の定期総会についての所感はどうですか。」

答 「私も手不足の為、平素は主として、執行部の意見を聞いてもその事を処理しておりましたが、総会に出席すると、組合員の不平や不満も良く分り、いい勉強になったと思えます。」

D 「どういう点が、いい勉強になった訳ですか。」

答 「個々の立ち上がった話は差し障りがありますから、若干の共通する問題点をあげましょう。第1に、組合の歴史的な発展段階ですね。日本に於ける父祖伝来の地縁的、血縁的な結合のある組合であれば、余程の事がなければ、それ程のもめ事もない筈です。ところが、移住地の組合は、全国が

らの集合体にすぎないので、組合を作っても、すぐ戦国時代に突入する傾向のあることです。従って、或る組合はいまだに武田信玄と上杉謙信が戦っている様な状態にあり、或る組合は漸く織田信長か豊臣秀吉の時代に入った感があります。また、幾つかの組合は、徳川時代の安定期に入っているという事です。第2に、移住地は、営農計画を練る所であって、作戦計画を練るところではないという事です。移住地を戦場と心得て、派閥闘争の軍議の寄せばかりやっていると、自分の耕地は荒れはてて、草畑の再生林になってしまふでしょう。移住地で勝利をおさめようとすれば、戦いに勝つより、ツングの1本でも余分に植えて、生産をあげる以外にない筈です。第3に、みんなが未確認の曖昧な情報におどき、感情だけで動きやすいという事です。根も葉もないことやつまらないことが、次から次に伝って、想像妊娠みたいにふくれ上がり、お互に罵り合って撃ちてし止まんと、張切っている様に見受けられます。

真相を確認しないで、興奮するのはエネルギーのロスですから、お互に冷静な話し合いが必要だと思ひます。第4に、私みたくに国の移住機関にいる者は、移住地を人物観的にばかり見ないで、飽くまでも生産力との相互関係に於て、把握すべきだと思ひます。移住地には、いろいろな形のサムライが多いので、戦国武将伝的にいく事は、話としては面白いが、下手すると、ものごとの公平な判断を誤ることになります。サンタローサやチャベス組合が、落ち着いて来たのは、執行部の指導力もさることながら、要は、組合全体の生産力にあると思ひます。第5に、総会に於て、目をつり上げて過激な質問をする方もあります。しかし、その心の奥底にあるものは、何とかしてよりよい平和な組合の発展を念願しているものであることを、善意をもって、知ってあげるべきであると思ひます。

第6に、総会にせよ、理事会にせよ、多数決の原理に立つた民主主義のルールに従って、運営される訳であります。多数派は少数派の意見も参考にして、取入れてゆくべきだという事です。多数の暴力がまかり通った

のでは、組合内はおさまらないこととなります。思想統一は望みませんが、行動の統一だけは、ぜひとも実行してほしいものです。第7は、計画面の厳正を期し、嘘のない決算をすることが、絶対条件だということです。1度決算が嘘をつくと、嘘を重ねなければならない事になり、最後にはとんでもない破目になります。

4月11日号

問 「日本の移住政策なるものは、経済政策として取扱われているのか、それとも、社会政策として、取扱われているのか、その点どうですか。」

答 「まことに根本的な問題ですが、これは、日本の議会で代議士さんが外務大臣に対してなされる質問ではないでしょうか。私には、責任ある回答は出来ませんが、私なりの考えを持っているつもりです。それでよければお話申し上げます。」

問 「結構です。貴方のお考えを承りましょう。」

答 「卒直に申し上げます。移住政策が経済政策であるか、或は、何々政策であるかというような分析的な問題の提起は、間違いでないでしょうか、当を得たものでないと思います。学校の経済政策や社会政策の単位科目の試験問題の答案としてなら、それで良いでしょうかね。私自身も長い間、この単位科目的な考えを脱却できなかった次第です。今の私は、現実から帰納して移住政策は、日本の政治問題、経済問題、社会問題その他いろいろな問題から合成された複合現象として、見てゆくべきものであると信じております。即ち、太陽の光線が、いくつもの色彩の複合現象であるのと同じです。従って、国の移住政策は、国内事情の反映として、或る時は人口問題や雇用問題が強く打ち出され、或る時は軍事的又は政治的色彩が強く打ち出される事があります。昔のブラジルコロノの移民は、前者の実例であり、戦時中の満州移民は、後者の例であると思います。戦後の新しい移住もその数にすれば、年に1万人にも満たぬ数です。これを雇用問題

や人口問題としてのみ見れば、全く無駄の多いソロバンに合わない話です。国や地方自治体の移住関係予算を合算して、年々の公共投資を続けていけば、それ以上の人口を養えるでしょう。

また、その金で産児制限の器具や薬品を無償配布すれば、年々1万人足らずの人口問題は、簡単に解決するでしょう。分析的に見れば、この様に無駄の多い移住政策を何故に国民の声として、推し進めてゆかねばならないかということは、さき程申し上げた複合現象として、より高い次元に立って見ていかなければ、解明出来ないと思います。

戦後の移住政策は、経済協力的な面から考えてゆくべきではないでしょうか。それであれば、移住会社の投融資の最終目標も皆さんの定着発展を通じて、後進国パラグアイに対する経済発展の使命が果せる様に持ってゆくべきだと思います。即ち、単に日本人だけの発展という民族的利己主義があってはならないということです。移住機関に働く私達は、一介の実務家にすぎませんが、常に誇り高い理想を持っているべきだと信じております。」

E 「よく解りました。移住地に於ける村の建設もやはり複合現象として、見てゆくべきでしょうね。」

私 「勿論そうです。移住地の村造りは、御承知の通り経済問題であり、教育問題であり、文化問題であり、その他いろいろの要素が複合しております。この事はそのまま組合のあり方や、運営にも反映しています。従って、問題を複合的にみてゆく限り、教訓的な精神論や、ひからびた法律論だけでは、移住地の村造りは達成出来ないことを反省すべきだと思います。」

国 威 喪 失

所変われば品変わる、という言葉があります。郷に入ったら郷に従え、という諺もあります。私達日本人は、良く立小便をするし、またそれ程の罪悪感も感じておりません。勿論、私もその1人です。ところがどういものか、キリスト教団に於ては、立小便を不作法なものとして、極度に嫌っております。私は、この方面の学がないので、その理由について、誰か物識りに尋ねてみようと思っておりますが、未だその機を得ていない次第です。パラグアイが、如何に後進国であっても、エンカルナシオンが、どんなに小さな田舎町であっても、町中で昼間、立小便をする事は、ポリシャに叱られるだけでなく、この国のシキタリにも、反する事になります。ここは、外国ですから、お互に不作法はつつしまねばなりません、中々、守られていない様です。この前も私が町を歩いていますと、或る日本人のサムライが、如何にも気持ち良さそうに、筒先を電柱に向けて生理的要求を満しつつありました。そこに、年の頃 50 近くの色の浅黒いパラグアイ人のオカミサンが、頭に荷物に乗っけて通りかかりました。女も、更年期を過ぎると、大胆になるのか、彼女は、ハポネースのホースを如何にも物珍らしそうに、じっと見つめていました。

そしてつぶやきました。

ケケチッコ!! (あんれまあ!!めんこい)と、これ聞いて、戦前派の私は、身につまされた思いで、何だか天皇陛下に申し訳ない様な、気持ちになりました。天皇制に無関心な若い人達なら、さしずめ日本の国威にかかわると思うでしょう。

勿論、多くの例外はありますが、ミン汁とタクアンで育った日本人は、体格も小さいので、部品も小さいのでしょう。欧州系の肉食人種と比べると、男性の兵器も野戦重砲と、バズーカ砲ぐらいのサイズと能力の開きがあるのかもわかりません。もって生れた菜食民族の宿命でありますから、今更、御

先祖様を恨む訳にも参りますまい。今1つは、人づてに聞いた話です。

1人の中年の日本人が、公園で立小便をしていたら、ポリシャに叱られました。彼は言葉が良くわからないので、ホースの流出作業をやめませんでした。ポリシャは近づいて、前の方から彼のホースを跳めて、大きさを見て、今度はやさしく注意しました。「な-あんだ。大人かと思ったら子供か、子供でも公園で、オシッコをしてはいけないよ。」と。我が親愛なる同胞が、子供扱いにされた事は、全く国の威信にかかわる話です。お互に立小便は、やめ様ではありませんか。

私が、日本男子の兵器の大小を論じ、品の落ちる立小便の話をするのは、崇高なる愛国の感情に基づくものであります。この点、皆さんに良く理解して頂きたいと思います。しかし、あまり深入って兵器のサイズ論や能力論をやると、我が移住地の貞節なる御夫人方を寂しがらせ、また、移住地の未婚のセニョリ-タ達に、将来の不安感や不信感を与えろといけませんから、この辺で止めましょう。

問 答 編 (7)

問 「我々は、パラグアイに来た以上、この国の風俗習慣にしたがって、現地の事情に即応した生き方をしてゆかなければならないと信じております。移住会社のありかたや、事業の運営も完全にパラグアイ式でなければならぬと思ひますが、どうですか。」

答 「パラグアイに限らず、外国に来ている日本人の中には、あなたと同じ様な考え方の人が多い様です。私をしていわしむれば、何でも彼でもパラグアイ式、現地式という考え方は、あまりにも常識論にすぎると同時に、一種の危険思想だと思ひます。まず、あなたのおっしゃる移住会社のあり方から、御説明申し上げます。

移住地造成における道路や橋梁やロッテ割等は、土木工学の科学的技術に則ってやっている訳です。この点は、万国共通の学問の世界であり、パラグアイ

式でないことも事実です。現地の実情といっても、飯の食い方、料理の仕方、男女交際のありかた、結婚式のやりかた、ベオンの使い方、賃金の決め方、契約の方式等々、その他、この国の風俗習慣ともいふべき社会的現象が、沢山あります。この点は、緩急宜しきを得て、即応してゆくべきものと思います。

造成の面においても、現地の実情に応じて、道路の幅をどうするか、どの様な橋をかけるか、ロッテ割を何町歩にするか、どんな倉庫を建てるか、と云うような現地即応はあります。しかし、工事とか作業自体は、飽く迄も土木工学という学問の教える所に従って厳正に、行なわなければならないのです。現地式に、適当にお茶でのごしていけば良いというのでは、後になって、上げも下ろしも出来ない結果を招きます。移住者の皆さんが、病気になる時かかられる、海協連の診療所の先生や、パラグアイ側のドクトルの診断や処方が、いづれもインターナショナルな近代医学の学問に従って、なされるのと同じです。或る程度までは、現地式の民間療法もいいでしょうが、それだけでは、いざという時危いですからね。移住会社の投融資のありかたにしても、全くこれと同様なことがいわれます。勿論、契約書の形式や融資の実務手続きには、今後とも是正すべき点は多くありますが、それはまた、別個の問題です。投融資については、日を改めて、詳しく御説明申し上げることにします。要するに、現地の実情に即応して云う文句は、口あたりはいいですが、下手に形を崩すと、ヤクザ剣法になり、御前試合に出られませんからね。」

問 「移住会社のことは、大体わかりました。何だか自信が無くなりましたが、私達自身のことはどう思いますか。」

答 「戦争中の気狂いじみた八紘一宇は、絶対にいけません。誇り高い日本文化の伝統と、インターナショナルな学問や科学技術は、飽く迄も高く評価すべきだと思います。何もかも、現地の実情に即してやるのであれば、日本人のレベルは低下し、そのうち日本人でもなければ、パラグアイ人で

もなく、バケモノが出来てしまうでしょう。移住地は、日本人の新しい村造りの場です。そこでは、すべてが計画的に、体系的に、無駄なく行なわれなければなりません。従って移住地では、現地の実状をとびこえた学問と技術を、ことさら必要とします。勿論、それを提供するのは、国の移住機関の責務ではありますが、皆さん方も、無反省な現地即応主義だけはつつしんで頂きたいと思います。」

5月1日号

問 答 編 (8の1)

Q 「移住金融と一般市中銀行のそれとの相違点、及び移住会社の基本的貸出態度、という様なことひっくり返して、説明願いたいと思います。」

答 「大雑把に一般的に言いますと、市中銀行がお金を貸す場合は、

(イ) 短期的な回収の可能性、(ロ) 相手方の経済の内容と能力、

(ハ) 資金の必要性、という3段階の順序で貸出態度を決めてゆくことになります。その貸出の資本源の大部分が、お客様の大事な預金である以上、預金者保護という立場からまた短期的な回収の可能性を考えるのは、当然な話です。(ロ)の相手方の経営の内容や能力には、現在及び未来における人的物的信用をも含むこと勿論です。(ハ)の資金の必要性をということになりますと、如何に国家内に必要な事業資金であっても、銀行のソロバンに合わない限り、無視されます。市中銀行が、資本制社会に於ける極大利潤追求の営利機関である限り、己むを得ないことです。従って、国民経済全体の立場乃至は、国の政策目的遂行という視点からすれば、資金の必要性と市中銀行の立場とは、必ずしも相容れないことになります。即ち、市中銀行は、資金の供給者である自分の立場とは、必ずしも相容れないことになります。

即ち、市中銀行は、資金の供給者である自分の立場からだけで、物事を判断して金融を行なうので、資金の需要者の立場は、軽視され勝ちです。

そこで、政府は国の政策目的遂行の為、資金の需要者の立場を考へて、国の財政資金を投じて、金融機関を作らざるを得ないこととなります。日本開発銀行や、農林漁業金融公庫や、中小企業金融公庫や、移住会社等がそれです。これが、いわゆる政策金融です。しかし、決して政治金融でないことを御承知願います。この政策金融の貸出し態度を大雑把に、一般的にいいすと、さきの市中銀行の場合とは逆に (イ) 資金の必要性、

(ロ) 相手方の経営の内容及び能力、 (ハ) 長期的な回収の可能性、という順序になります。

金融である以上、如何なる場合でも、回収ということは絶対条件です。政策金融に於て、資金の必要性が第1次的に取上げられるのは、決して回収をルーズにせよ、というのではなく、公的立場より、国の資金回収の遂行が最優先的になされるからであります。

この点、くれぐれも感違ひしない様に願います。当社の行なっている移住金融も、移住者の定着発展という国の政策目的遂行の為の、それでありますから、私達がどの様な立場で貸出しに臨んでいるか、自からおわかりになると思ひます。

問 「基本的な考え方はよく解りました。実は、私個人も、いろんな計画を立てているので、もっと簡単な貸出しを行なってもらいたいのですが。」

答 「如何なる資金の需要者の立場といつても、皆さんの営農の発展に、直接間接必要な資金に限定され、而も、組合単位であることを承知しておいて下さい。従つて、単なるお金の儲けの為に居酒屋を始めるとか、砂糖の買占めをやるとかいう様な資金の貸出しは、出来なわけです。また、資金の需要者の立場を重視するといつても、皆さんの方で、必ず借り入れる権利があるのだと誤解されて困ります。

条件がそろえば、借り入れる資格があるということです。

中には、銀行から自分の預金を引き出す様な気持で、移住会社の資金は、国民の税金だから貸すのが当然だと、命令口調でおっしゃる方がありますが、

金融の本質や仕組みをよく理解願いたいと思います。

5月15日

問答編 (8の2)

Q 「融資に際し、資金の需要者側におけるその資金の必要性を、認定される移住会社の判断基準について、御説明願いたいと思います。」

答 「資金の必要性、というだけでは、単なる文学的表現にすぎません。若干、教科書的な説明になりますが、我慢して下さい。資金の必要性の認定については、いろんな接近方法がありますが、その1つを申し上げます。わかり切ったことですが、まづ資金の必要性といっても、その主体は、資金の需要者である移住者団体、または、個々の移住者の皆さん方です。何のための資金需要かといえば、広い意味の開発投資のためです。更に1歩突込んで観察すると、その開発投資を行なう投資動機の内容を考えなければなりません。問題は、その投資動機が、移住地の正常な発展に直結して、均合いの取れたものであるかどうかということになります。

第1次段階における均衡は、移住者個々の自給体制の確立を目標とすべきであり、第2段階に於ける均衡は、企業農家としての拡大再生産を目標とすべきであると思います。この均衡を考えないと、投下資本の資金効果は滅殺され、極端な場合は零になります。ところで、動機的に分析してゆくと、投資は2つに分類されます。専門的に申し上げますと、第1は、独立投資であり、第2は、誘発投資であります。第1の独立投資というのは、この投資が行なわなければ、移住地の発展は停滞するか後退するか、最悪の場合は、破産に類する類の投資です。先づは、皆さん方の自己のロツテの開墾に対する投資、更に、合理化と競争力の強化と労働節約を目的としてなされる、役畜や機械化に対する投資がそれです。また、組合や連合会が、運搬用のトラックを購入したり、麻袋工場や乾燥工場や倉庫や事務所等の建設に投資するのも然りです。この独立投資が行なわれる場合は、往

往にして、短期的には、金利や利潤や生産高コスト等の何れかが軽視され、また、無視される事があります。

云いかえますと、或る期間に於ては、経営の無理を押しても、現在の所得に関係なく投資が行なわれることとなります。

この独立投資の理論的性格と背景をよく理解しないと、短期的な収支予想の数字だけで、もの事を判断する誤りをおかし易いこととなります。第2の誘発投資というのは、所得の増減に従って、或は景気、不景気に左右されて行なわれる投資です。この点、所得の増減に左右されない独立資金とは、質的に差異があります。所得がふえたから、住宅に投資して立派な普請をするとか、エンジンで儲けたからカニオネットを買う、というのは誘発投資です。

専門的にいいますと、独立投資は、単純乗数という数式で示され、誘発投資は、加速度効果を織りこんだ、複合乗数という数式で示されますが、こんな事は、覚えておく必要はありません。要するに、独立資金は、移住地経済の成長を支持してゆくものであり、誘発投資は、移住地経済の短期的な変動をひきおこすものであります。初発的の移住地の資金需要の必要性は、移住会社からみた場合は、この独立投資に限定して、考えてゆくべきものだと思います。要するに、移住金融は、この独立投資を貨幣面だけでなく、実務面からもよく検討し、同時に、長期的な視野から移住地の発展を推進してゆくべく、独自の分野を開拓し、確立してゆかなければならないと信じております。

問 答 編 (8 の 3)

- Q 「移住会社が行なっているのは、単なる金貸しではなく、確たる理想と信念に裏付けられた金融を目的としていることが、よく分かりました。ところで、国の機関である移住会社の移住地に対する態度は、通常の債権者意識だけではいけないと思いますが、その点どうですか。」

答 「勿論そうです。単なる債権者意識だけでは、長い将来の移住地発展など到底望めない話です。移住会社は、国の政策目的遂行のため、主として、土地の造成分譲と金融を行なっております。前者について云えば、フラム、アルトパラナがその実例であり、そこに於ては、パラグアイ国の私営植民地法が適用されます。即ち、この場合、移住会社は、この国の法律による植民地管理権者であります。しかし、この私営植民地法を鋪の御旗にすると、移住会社の土地ではないチャベス、コルメナ、アマンバイ移住地等に対しては、おかしな事になります。

従って、パラグアイ移住地の集団移住地全般に通ずる現実の立場を考えなければなりません。それは、パラグアイに関する限り、組合本位の金融ということに求められるべきだと思います。というのは、金融が組合本位で行なわれることにより、組合即ち、移住地の基礎固めと発展の下支えが行なわれている訳でしょう。

勿論、組合執行部の経営手腕と各組合員の自覚が前提であります。

この組合本位の金融ということとは、卒直に言って、皆さん方が奪い取られた権利ではなく、国の運営方針に基づいて与えられたものであります。従って、移住会社と組合との関係は、市中銀行が貸付先に対する様な、単なる債権債務関係ではなく、移住地発展の為に意図され、高度の政策的なものであります。即ち、組合の強化と移住地の発展を期する為には、多数の非組合員の利益を犠牲にしても、組合本位の金融をつらぬいている訳です。若し、この体制が崩れると、組合は、重大な危機にさらされることとなります。この点をよく理解して頂ければ、組合の自主性についても、一部の方が云われる様な、全学連みたいな発言はなくなると思います。勿論、私は、あくまでも多数決の原理に基づく総会や理事会の自主的な決議と運営を尊重するものであります。

しかし、組合の運営が、国の施策の軌道をそれて暴走する様な場合は、移住会社としては、重大な決意と行動力とを以て、組合の反省を求めざる

を得ないこととなります。それ以前の通常の場合に於ても、私は組合の運営に対し、無免許運転みたいな、場当りの発言や、酔っ払い運転みたいな感情的な干渉は、絶対すべきでないと思っております。しかし、国の移住実務機関の立場から、居眠り運転みたいな放任は許されませんから、時と場合によっては、公平な立場から卒直な意見を申し上げることにしております。

この場合でも、そこにはいわゆる、金貸し根性の債権者意識はあってはならない筈です。お互いの目的は1つであり、移住地の発展という以外にない筈です。心を空しうしたお互いの話合いと理解があれば、どの移住地に於ても対立のない前進が行なわれるものと、確信しております。

6月11日号

大体6ヶ月の予定で、移住地を見る眼を書いてまいりましたが、そろそろ期限も来たので、この辺で打切る事に致します。今後は必要に応じ、具体的な問題の解説につとめつつ、相互の理解を深めてゆきたいと思っております。終りに臨んで、移住会社の実施面を担当する責任者として、私自身の事業の心構えの一端を申し述べ、結びにしたいと思っております。

東洋の古典に知、仁、勇ということがあります。この3つの徳目の中で、最も大切なのは仁であると思っております。孔子も、「仁なるかな仁なるかな」と申しております。

この仁の哲学は、深遠、中々難かしく、その方面の学のない私には手に負えません。仏教の慈悲やキリスト教の愛とは違ったものがあると思っております。しかし、仁からこの封建的な色彩をぬぐい去って、近代的な感覚に翻訳すれば、それは西歐的なヒューマンイズムの精神に通ずるものがある様に感じます。勿論、両者は別個なものであります。人間の移住を扱う移住機関に働くものの第1の適格条件は、心の底に静かにたたえられた、ヒューマンイズムの精神がなければならぬと思っております。この精神的基盤の上に、謙譲な真心があっ

てこそ、お互いの理解と協力が得られるのではないのでしょうか。そこには、ポリゴを翻がえしたハッタリや、自意識過剰の権力思想があってはならない筈です。心を空しうして、皆さんと共に苦しみ、皆さんと共に楽しみつつ、より良い平和な移住地の発展に努力することこそ、私達の義務であります。この使命感に徹し、この義務を黙々としてひそやかに果して行くにあたっては、あらゆるファインプレーも、スタンドプレーも存在し得る余地はない筈です。私は、今日迄ブラジルに在勤し、ボリビアに駐在し、そしてアスンシオンの1年余りの勤めを終えて、このエンカルナシオンに参っております。自分自身の心の遍歴や、人間形成の過程を申し上げるつもりは毛頭ありませんが、かつては在勤中に、いい仕事をしてかえりたい、という気持にあふれておりました。しかし、このエンカルナシオンに来てからは、移住の問題を、目や耳だけではなく、体全体の皮膚で、直接に感じ取る幸運に恵まれております。そして、いい仕事をしたいという気持の底には、たとえ無意識ではあっても、何かしらの点教かせぎに通ずるものがある事を発見し、自己の人間的未熟さに赤面している次第であります。いい仕事という事ばかりか、ある間はまだ1人前の人間の態度とは云えません。いい仕事とは、意識して行なうべきものではなく、結果的に、その軌跡をふり返って見て、自らのいい仕事が出来上がるのでなければならぬと思います。

移住業務は、人間を扱う仕事でありますから、非常にむづかしいと云われています。しかし、人間を扱う仕事であればこそ、お互いの意識が通ずる場合は、これ程楽しくやり易い仕事は、他に少ないのではないのでしょうか。

勿論、私個人は微力であり、私達の事業だけでは解決できない問題が、山積みされております。従って、会社の基本方針や、上司の指示に従って、現場でその日その日の仕事を片づけていかなければならない立場にあります。そこには、観念論や要項論は通用しません。ものごとを、円満に片付けていけない限り、いかなる名論卓説も、空廻りするばかりであります。事業所の実施面の仕事とは、そんなものであります。しかし、応用問題をといてゆく

ためには、基本的な公式や型をよく勉強しておく必要があります。

6月21日号

私は過去半年に亘り、私の基本的な物の見方、考え方を申し述べて、皆さん方の反論もきかせて頂き、いい勉強になりました。原論的な考え方というものは、如何なる場合でも必要だと思えます。

数学の勉強をする場合、このことは特に痛感されますが、柔道や剣道や相撲の場合でも、基本的な型が出来上がっていなければ、強くなれない筈です。戦後の自営移住は、始ってから未だ10年も経ちません。

第3者より見れば、失敗もあれば成功もあり、まあまあとやっと合格点ももらえる様な面もあるかと思えます。皆、熱意はあっても、手さぐりでやって来た様な感じがします。楽譜無しで調子外れの歌を歌って、自己満足して来た面もあるでしょう。第3者は、その歌をきいて、恐らく苦笑したり、不快感を持ったりしたこともあるでしょう。私のささやかな念願は、戦後の自営移住に、せめてパラグエイ移住にだけでも、そのありかたについての公理や定理や公式みたいなものを、造り上げてみたいということにあります。それには、私の力は余りに微力であり、日暮れて道遠しの感を深うします。立派な作曲が出来上がれば、歌調はいくらでも準備出来ます。そして、歌のうまい人が上手に歌ってくれます。私は、移住者の皆さん方が、原始林の中から、血と汗の結晶として得られた貴い体験と、英知の御協力を得て、私の悲願の一步なりとも達成したいと思っております。勿論、現実の世の中は、対立抗争の世界ですが、パラグエイ移住の発展と、前進のためには、お互いが、この対立を越えた立場から、皆の英知をよせ集めて、問題の解決に努力して行きたいものです。

あまりにも日本的な風景だと思えます。また、この貯水池をつくるに際しては各農家の技術と資本力と労働力がものをいいますが、実際問題としては各人の将来に対する見通しとか好みとかに、左右される率が多いように見受けられます。従って深見式貯水池、山脇式貯水池、馬力原式貯水池、磯部式貯水池、松宮式貯水池というような構造的な差が出てまいります。

人によっては、この貯水池の構築に極めて無関心か、或は不感性的な方もあります。そうすると入植後5年6年たっても所得の流れが不安定であり、同時に心のあり方も落ちつきを失い、遂には折角、資本をつぎこんだロッテを捨てて、移住地を去るといふことも起こります。然し、働く意志と働く能力と通常の経営能力さえあれば、たとえ自家労働力や資本力に欠ける所があっても、自らの実力に対応した立派な貯水池が造れるはずであります。一例をあげますと、夫婦と年のいかなないお嬢さん2人の親子4人で携行資金がありあまっていたとも思われぬサンタローサの村久木さんが、手堅い村久木式貯水池を造りあげつつあるのは、まことにいい参考になると思えます。要するに奥地農業に於ける大面積の経営にあつては、それぞれの人間の英知と度胸により設計されたこの貯水池たる富のたくわえを如何に早く上手に造りあげるかが、最も大事な問題であると思えます。入植後数年も経った今日に至って所得の個人差が生じ、はっきりと階層の分化が行なわれつつあります。要はこの貯水池の問題であると思えます。

(2) ペオン代と自給体制の確立

例年山伐り時期になると移住地内ではペオンがいない、ペオン代が高い、ということが喧しい問題となります。大面積の奥地農業にとってはペオン対策は最も深刻な問題です。パラグアイの人口が170万としてその半数85万が男です。このうち仮に15才から55才までを労働生産人口として計算してみても知れた数字です。またこの国の生活慣習から見て、労働の流動性は極めて乏しいので、高賃金を出したからといって、直ちに所要数のペオンが集まるものでもありません。ラ・コルメナ移住地には定着した現地人が多いので、昨今でも

(食料抜き)
シン・ゴミーダ70グラニーというのが相場だときいています。これはアルト・パラナの概ね半額です。パラグアイの農家の生活様式から言って、マンジョカと肉の最低生活が確保されると、その定着した住いから動きたがらないのが普通だと思われます。そうすると土曜の夜は、^(ダンス)バイレとギターと^(酒)カニヤで遅くまで自由な生活を楽しみ、日曜は朝からお寺参りに行って神父さんの有難いお説教をきいて、後生安楽を祈りカトリック的な法悦にひたるといふ平和な生活慣行が確立されます。

このような祭礼的な安住と満足感の支配しているおくれた社会では、人間が富を求めて積極的に移住し、無限の欲求を満足させてゆくという活発な動きは少ないはずで、この国の労働力の流動性の少ない理由の一半は、この辺にあると思われる。また余り貧しいことも、労働の移動を妨げる大きな原因になります。移動するためには路銀もいれば、最小限の食器や衣料や寝具の準備も必要です。多くの貧しい農家ではこれらが家族共同の形で使用されています。その日暮しの農家にとっては、出稼ぎ先から家族にお金を送るまでの間の家族の食いつなぎも気になります。

出稼ぎにゆく意志と能力のある人間でも、これでは身動きできない訳です。労働の流動性の低い国では労賃は地域的に極端な格差が生まれて来ます。従って移住地内に於けるベオンの需給関係とこの国のインフレーションを絡み合わせて考えると、ベオン代は年々上昇の傾向にあります。要するにベオン代の高いのは、この国の国民経済の構造上の問題に根ざしているものでいろいろと難かしいことが多いわけです。これにはベオンを必要とする移住者側、即ち需要者がこれに適応した対策を考える必要があると思います。最近の日本でもそうですが、物価が高くなったからといって騒いだりボヤイたりしては、個人としては何の解決もできません。風呂代が高くなったら1週間の中、何日かは家庭の行水ですませる手もあります。パーマメント代が高くなったら娘さん達はセットだけは出来るだけ自分の家でする手もあります。つまり需要者適応の解決策です。移住地におけるベオンの高賃金に対処する最も手っとり早い方法

は、一刻も早く各農家が自給体制を確立して、この需要者適応の原理を応用してゆくことだと思います。

これは誰でも知っている当然の理屈ですが、まだまだ完全に実行されていないようです。自給体制が確立されたら仮りに1町歩の山伐り代が2,500グラニーとしても、その内グラサ、雑豆、米、マンジョカ、鶏、豚肉等は自家生産の現物払いになりますから、それだけ現金払いはへります。

人によっては自家製のメリケン粉の現物払いをしている方もあるようです。現物払いが5%になったとしたら2,500グラニーの頭金があれば2町歩の山伐りが可能となります。中々算数通りにはいきませんが、自給体制の確立如何ということは、大面積の奥地農家の経営上のきめてだと思えます。

しかし、現物払いによるペオン代切り下げにも限度があるので、これに併行しつつ畜力や機械力の利用を積極的に研究し取り入れて行かなければ行詰りがきます。移住会社としても速かに現地人の入植を具体化し、この方面からのペオン対策を実践化して行くべきだと思っております。

(5) お金の経済と物の経済

東京でサラリーマン生活を送っている若い息子夫婦の家に、郷里の農村から両親が東京見物に来たとします。1週間もたつと食費の出費もかさむので、息子のお嫁さんはひそかに家計簿の帳尻を眺めながら顔をしかめるという情景がみられます。逆に、この息子夫婦がお盆のお墓参りに田舎の実家に帰ったとします。台所をあずかる母親は一週間や十日で顔をしかめることはないはずです。双方の情緒的な人間関係を離れてこのことの根本を考えると、息子の家庭は給料生活者として100%のお金の経済を営んでいるからであり、農村の実家はお金と物との二本建ての経済を営んでいるからだと思えます。

即ち、息子の家庭では生活物資の一切はお金で仕入れたものでありますが、実家ではお金で買ったものの他、米もみそも醤油も野菜も鶏も卵もみんな自給であります。

教科書的な文句で言えば、息子の家庭は貨幣経済一本建てであるが、田舎の

実家は、“貨幣経済”と“実物経済”の二本建てであるということになりましょう。

農村社会におけるこのお金と物との二つの異なる価値体系を貨幣換算一本に集計して考えることは、統計上の便宜手段としてなら結構ですが、現実にはいろんな無理があるので、この種の数字の取扱いには慎重な注意が必要です。パラグアイの広面積の奥地農業にあっては何よりも自給体制の確立が必要ですが、この場合は特に物の経済ということを考えるべきだと思います。

ペオン代の一部として鶏一羽を現物払いとします。放し飼いで知らず知らずのうちに雑草の如くふえてゆく鶏の場合は、考え様によってはタダだと見ても良いでしょう。

これを一羽80ガラニーで換算するのと現金80ガラニーを支払うのとは、大きな違いがあり同一ではありません。

グラサ、米、マンジョカその他の現物払いの場合は右の鶏の例とは違いますが、現物払いは飽くまでも現物払いであり、現金払いではありません。マイルスの原価計算をして或人はペオン代が高いから引き合わないといい、或人は充分採算がとれるといいます。これは現物払いを現金払いに換算して原価計算をすると現物と現金の二本建てで、原価計算をするのとの違いから来る点も有るように思われます。赤字だ赤字だと言いながら、現実には間作のマイルスで新しい資本形成が行われつつあるのは、その原価計算のあり方に何か割り切れないものがあるように思います。また本命は永年作物のはずなのにその間作のマイルスや大豆の原価計算に、山伐り代や除草に全部ぶち込んだのも理屈に合わない話です。マイルスや大豆の間作をしない場合でもツングの除草費として、年々いくばくかの出費はいるはずで、間作の原価計算にあたっては、永年作物との割掛けが問題にされるべきだと思います。

同様なことは私達の融資の審査に就いてもいえます。粗収入として支出との差引計算だけで赤字だから、回収困難との結論を出すのは、子供の算数であります。金融なるものは、貨幣経済本位でありますので、提出される資料はすべ

てお金に換算して評価され記載されてあります。これは事務処理上やむを得ないことですが、ここに大きな数字の魔術がひそんでおります。私達はこの数字の背後にあるお金と物の二つの経済の動きを、出来るだけ正確につかんでいかないと、とんでもない判断のあやまりをおかすこととなります。それには、個々の農家の深層の段階における実質的な労賃支払いの内容や、統計や、書面にあらわれない物の動きをよく知っていなければならないわけです。

(4) 組合長と専務の適格条件

戦争はなやかなりし時代に軍人勲論なるものがありました。わが国の軍隊は世々天皇の統率し給うところにぞあるに始まる、延々たる有難い名文の暗誦には誰でも苦勞したものです。世々天皇の統率したまう軍隊は、万世一系の絶対主義専制国家のほろにがい思い出がありますが、組合の場合は違います。即ち、民主主義のルールに従い多数決の原理に基づいて選出されたのが組合長であり、専務であり、又その他の役員であります。従ってわがイタプア県の連合会は世々深見会長の統率し給う所でもなく、又わがアルトパラナの組合は、世に稀な組合長の統率し給うところでもありません。他方山脇組合長は、大正町のツワ者どもを討ち平げ給いて、移住地を知らしめし給うた訳でもありません。

これらのことはラバス組合にもチャベス組合にも同様にあてはまることであります。組合長とか専務は、民主的に選出された任期のある方々であります。アルトパラナの役員は任期一年を除いて、連合会も各単協も役員は二年であります。何れも僅かな期間でありますから、一たん選出した以上は、余程の経営上の失敗か、御本人の個人的な都合がない限り、任期だけは完全につとめてもらいたいものだと思います。協同組合の役員は、政党政治による内閣の更迭とは根本的に違いますから、組合員も執行部のあげ足とりをやめて、多数が選んだ役員に強力な協力をして行くべきだと思います。しかし現実の問題としては、私達の耳にも次のような立話やささやきが聞こえて参ります。即ちとくにそこの組合長は、日本では勤め人だったから、営農のことはうとくて駄目だとか、どこそこの専務は一人前のことをいうが自分のチアクラはカッフエラ

でなっちょらんとかいうたぐいです。

このことを裏がえして言えば組合長とか専務は純農出身で、自己のチャクラの営農状態も立派でなければ、組合の指導者としての資格はないということだと思います。

如何にも尤もらしく聞こえますが、果してそうでしょうか。あれこれと理屈をならべる前に現実を眺めてみましょう。深見会長以下各単協の組合長専務の前歴を調べてみますと。チャベスの西大条組合長以下は純農出身は一人もいないはずで。即ち、日本に於てはそれぞれ町会議員、町の助役、大学出のインテリ、建築家、町の農業指導員、染色業、中小企業の経営者、警察官、華北交通の引揚鉄道員、町役場書記等々で何れも社会人として立派に活躍してこられた方々です。時間の余裕と興味のある方は、過去における各単協の組合長や専務の前歴しらべをやってみられてもいいでしょう。純農出身は少いはずで。結論的にいえば、組合という組織の指導者たるには敢えて純農出身とかサラリーマン出身とかの区別をする必要はないということです。要は経営能力の問題であると思います。

純農出身でないといっても入植後の営農の経験はそれ以上に貴重なものです。お互に高く評価すべきものではないでしょうか。又組合長とか専務は模範的なチャクラの経営者でなければならないということは、一つの迷信だと思います。一部の方は、自他共に許す立派なチャクラを持っておられますが、それには資金や家族構成という前提条件があるはずで。この条件を備えていない大部分の組合長や専務に、雀の涙ほどの月給しか払わないで、組合運營業務という大きな犠牲を強いながら、チャクラをカップエラにするなどいっても無理な話だと思います。野次馬的な批評をすることはた易いことですが、時には組合員も組合長や専務の立場を考えて、みんなで集ってカップエラの草刈りを手伝って上げる位のサービス精神が必要だと思います。総会で代議士ばりの協同組合精神をブツのは、口達者な人なら誰でも出来ましようが、真の協同組合精神の実践的な意義はもっとも手近な所にあるはずで。

(9) 定期預金とお米の自給

昔、中国に老子という哲学者がいたことは皆さんも御承知のはずです。この人が面白いことを書き残しています。即ち「国を治めるのは丁度小魚を煮るようなもので、余り箸で突き廻すと形が崩れてどうにも始末に困る」という意味のことです。老子も子供のときから小骨の多い魚ばかり食べさせられて、余程身に滲みていたのでしょう。このことは老子ならずともコロニアの皆さん方も、小川でとれた小魚を煮るとき箸でいじくり廻して骨も身も頭もバラバラにしてしまったにがい経験がおありのことと思います。私は村落社会の自由放任の無政府状態を理想としていた老子の思想には到底賛成できませんが、この小魚の比喩は移住地の問題にも関連があり中々面白いと思います。勿論、イタプア農協連傘下の少単協は小魚ではありません。しかし或人は、チャベス組合だけは小魚ではないかと反論します。ところがどう致しまして、チャベス組合は組合員こそ40数名のこじんまりした組合ですが、1戸当りの平均粗収入に至っては右の少単協の筆頭です。それに気合いのかかった菅原専務の若い潑刺たる機動力を見ていると、小魚どころか1米以上もあるドラードかバクーかサルモンみたいな感じがします。チャベス組合の名誉と信用のため一言申し上げておきます。話はさておき、私がここに老子の小魚の話を持ち出したのは、私達の移住地管理に当っても余り細かいおせっかいは禁物であるからです。近頃はやりのインテリ向きの言葉でいえば、余りミクロの世界にまで降りるなということ。従って細かいことは組合員の多数が選んだ執行部を信じて、その責任において解決してもらわねばなりません。ここには、私の立場上二つの問題を提起したいと思います。

第一は連合会も単協も、定期預金の取入れに一般の努力をして欲しいということ。ことです。

信用部でお金を預かって、それを運用している以上普通預金だけでは極めて不安定で、資金計画が立たないはず。それどころか一步を誤ると、預金の引き出しにも応じられないことになり、抜きも差しもならないことになります。

そうすると、誰でも出荷代金を殆んど引き出して自衛的なタンス預金を始めることになります。

その結果組合は益々窮地に追い込まれ、購買部の仕入れにもこと欠くことになります。組合の購買部で生活物資が入手できないとなると組合員の心は組合を離れ、次の預金どころの騒ぎではないはずで、かくて、組合は空中分解の危険にさらされます。日本の大銀行でも定期預金の取入れには必死です。どんな大銀行でも、当座預金、普通預金だけでは資金計画が立たないからです。

連合会や単協で定期預金を取入れることが如何なる困難かはだれも承知しています。しかし信用部の運営には僅かづつでも良いから、定期預金を取り入れてそれを累積してゆくことが必要です。組合の経営内容と組合員の協力について、鶏と玉子みたいな前後関係を論じていては、ものごとは解決しません。組合も経営を堅実化して内容をがっちり固め、組合員も組合強化のため同時的な協力をして定期預金を通じて、組合の発展を期する必要があると思います。

第二は組合全体としての米の自給です。勿論個々の農家に対する営農指導の面からいえば、ロッチの条件に応じ無理して米を作る必要はありません。それは正しいことだと信じます。しかし組合全体又は組合の経営という面から見れば、また別個の問題が起こります。

部分の真は必ずしも全体の真ではなく、奇数を足したものは奇数ではありません。端境期は別として毎月百俵以上の米を外部から買う組合があるとすれば大変です。即ちそれだけの大金が毎月組合外に流出することになり、組合の金繰りは益々苦しくなります。止むを得ない物は別として組合内で米の自給が出来れば、その金は組合内の預金の振替で済み、それだけ組合の経営は楽になります。米の自給に就いては強い反論もあると思いますが、私の申し上げているのは個々の農家の問題でなく組合全体の問題です。組合の経営陣においても主食である米の自給については経営的な立場から真剣に研究し

て欲しいと思います。

(6) 逆か子と子宮外妊娠

私達は会社の仕事の性質上、毎日移住地に関する数字をひねくり廻して加減乗除の計算を行っております。日常何の気なしにやっていることですが、よく考えてみるとそれは十進法という数字の原理に基づいている訳です。発生論的に見てゆきますと、恐らく両手の指を合わせて十本という初歩的で便利な計算法が十進法のそもそもの始まりだと思います。また歴史的な古い慣習として一部には例外的ながら十二進法や六十進法も取入れられています。12で1ダース12ダースで1グロスというのが12進法であり、60秒で1分、60分で1時間というのが60進法であることは子供でも知っています。しかしこの12進法や60進法を全国的に数字の世界に持込むと、まことにややこしい混乱が起こります。私は多数決という民主主義のルールは十進法みたいなものだと思っています。従って民主主義の世界にこの多数決以外の原理を適用しようとする時、物事がきしんでうまく行きません。しかしコロニアの一部には世間様はどうであれ、俺達はおくまでも少数決でゆく、又それが最も正しいのだと強く主張している方も若干あるようです。世間は広く人間の数も多いので、いろいろな型の人がいるものだと感心します。勿論多数決の原理は、ものごとをうまく取りまとめて処理して行くための一つの方法論であり、神様の目から見れば多数必ずしも正しいとは限らず、少数また必ずしも誤りであるとはいえない訳であります。

しかし私達は人間であり神様ではないのですから、一応世間を通り、世間が納得している多数決のルールを尊重して行くべきだと思います。少数決の原理をおしつめて行くと、独裁という極めて危険なフェシズム思想に通ずるものがあります。私は移住地社会は多少まわりくどくても、飽く迄も多数決による民主的な運営を基盤とすべきものだと信じています。その代り責任は移住者個々や組合が買ってもらわなければなりません。従って私は独裁はもとより、明治の欽定憲法による勅選議員式のやり方には強く反対します。假

りに組合の役員 10 名として 5 名は海協連の推薦するもの、残り 5 名は移住会社と推薦するものでなければならぬとしたら、結果はどうなるでしょう。このような大政翼賛式の官選執行部は移住機関の()かいらい政権であり、官僚的存在に過ぎません。移住地管理は占領行政ではないのですから、移住実施機関の手による代官政治は、絶対に排除すべきだと信じています。代官政治の下では移住者の自主的な責任ある行動と発展は到底期待されないからであります。歴史的にみても代官政治の下では、固定忠治のヤクザやバクチウチのぼっこが落というようになります。

また、少数決というのは民主主義の原理よりみれば逆か子か子宮外妊娠みたいなものだと思います。逆か子だと分れば始めのうちなら産婆さんがもんで正常の位置にかえすこともできます。この産婆の役を果すのは組合の執行部の責任です。子宮外妊娠は悪質な反乱分子ですから、放っておくと組合という母体が危険になります。従って早急に手術をしなければなりません。しかし、執行部は異常妊娠に気がついたら逆か子か子宮外妊娠かと慎重に診断して、誤診のないよう、最善の方法を講ずべきだと思います。下手な手術をすると組合との債権債務関係という後産がのこり、いつ迄も母体にさわりがあります。この点は率直に言って、チャベス組合もラパス、富士組合も身をもって体験している所だと思います。また最近の日系内地の若い人達みたいに、都合が悪ければ直ちに掻爬してかき出すという、安直な除名処置をとるのも長期的には母体である組合をいためることになります。これ以上具体的な固有名詞をあげて説明すると差障りもあるので、一般論で打ち切ります。現場の責任者という臨床家的な私の立場からみて、移住地の秩序ある平和な発展のためには、組合員も執行部だけを責めないでお互に反省して協力してゆく必要があると思います。

(7) 天皇陛下の親類みたいな人達

十個のみかんがあったとします。まず一番悪いのを食べて、その次に残りの一番悪いのを食べてその次に残りの一番悪いのを食べるという風に、順に

一番悪いのから食べる人があります。これと逆に一番いいのから順次に食べる人もあります。前者は合計して十ヶとも一番まずいみかんを食べたことになり、後者は合算して一番おいしいのだけ食べたことになります。客観的なみかん自体の内容は、双方とも同じであります。食べる側の主観的な味覚からいえば大変な違いがあります。それぞれの人間の性格や慣習によることです。ですから如何とも仕様がありません。これと同じように移住地に入植しても悪い点ばかりひろいあげていつも不平満々として文句ばかりいう人もあります。ブヨが多い、ペオン代が高い、文化生活がない、学校が遠い、組合の幹部や移住機関の連中が不親切で怪しからん等々です。逆にいい点を取り上げて営農に感心してる人もいます。ブヨはいるが山をひらけばいなくなる、ペオン代は高いがアルゼンチンに比べたら安い、開拓地で当初から文化生活を望むのは無理だがラジオにサンパウロの日本語放送が入って結構楽しめる。学校は遠くてもせいぜい4軒ぐらいのもんだ。組合や移住機関の職員も多人数相手ではかゆいところまで手が届かないが、人様にばかり頼ってはいけない、何といたって土地が肥えているから働きさえすれば将来が楽しめる等々です。どちらのいうことも事実です。

欠点ばかりみている人は悪い移住地に来たことになり、ノイローゼ気味になって営農も伸びません。長所だけを見て行く人はいい移住地に来たことになり、営農にも励みが出ます。

短い人生でどちらが幸福であるかは、自ら明らかです。私は人様に精神訓話をする気は毛頭ありませんが、お互に考えるべき問題だと思います。現実の人間の世の中は極楽浄土ではないのですから、長所をのぼすことにより悪い点は努力しつつ時間をかけて克服して行く他にないと思います。不平と文句ばかりいう人の中には、日本に於ける家柄を誇ってみたり、大金持だったみたいのことを言って宣伝している方もあります。聞いているこの人は天皇陛下の親類だったのかなあ、と恐縮することもあります。そんな特別の御仁は別として、日本における私達庶民の生活というものはみんな貧しくて

質素なものであったはずです。従って移住地に来た以上、お互に余りハッタリはいわない方がいいと思います。こんな天皇陛下の親類みたいなことをいう人に限って、何もかも移住会社の責任にするので困ります。開拓移住者は赤紙の召集令状によってパラグアイ国に動員されて来たのではないはずです。移住の応募はしたが、それは自己の責任に於て来た訳ですから、自らの責任に於て営農を確立してゆくという自信と誇りが必要だと思います。勿論、私達移住機関は国の許す限り、全面的な援助と協力を惜しむものではありません。中には面白い人もいます。雨が降らないのも移住会社のせいだ。ベオン代が高いのも移住会社のせいだ夫婦喧嘩するのも移住会社のせいだ。娘が縁遠いのも移住会社のせいだ等々何でも移住会社に尻を持って来ます。

まことに愛嬌のある話で怒る気にもなりません、余り人のせいにはばかりされても困ります。ひどい人になると、セニョーラが子宮後屈になったのも移住会社のせいだ、娘が浮気しておなかが大きくなったのも移住会社のせいだといったりします。

こうなると愛嬌を通り越して全く迷惑です。セニョーラの婦人症や娘の妊娠に関しては移住会社は何の責任もないはずです。移住会社の名誉と信用のため、この点は特にはっきりと申し上げておきます。

(B) 自営農の誇りと自信

日本は昔から百姓は貧しいもの、農業はつらいもの、と相場がきまっています。思うに日本の古代国家の成立以来明治維新に至るまで、農民は恰も食糧生産と賦役を提供するために、生まれて来た家畜の如く虐いたげられ、生かさぬよう殺さぬように取扱かれて参りました。それから明治大正を経て昭和の敗戦による農地改革に至るまで農民は高率小作料にあえぎながら、地主に奉仕して食うや食わずのみじめな生活をつづけて来ました。長い間の農民残酷物語です。これでは百姓は貧しいもの、農業はつらいものということは歴史的な事実であり、敢えて共産党の人達の宣伝じみたお説教を聞く迄もありません。しかし如何に農地改革をやっても日本では耕地が少いのですか

ら、八反百姓や五反百姓で暮しが立って行くはずがありません。パラグエイの場合は日本とは根本的に事情が違います。この国は南米でも後進國中の後進國で、農業や牧畜や森林開発が國の經濟を変える重要な産業です。如何にお金儲けをあせっても、國民經濟の發展段階に即応しない産業ではうまく行くはずがありません。それでこの國で産をなそうと思えば、日本人口はこの國の重要産業である農業こそ一番手っとり早い即効的な産業だと思えます。1 ロツテ当りチャベス 20 町歩、フラム 25 町歩、アルトバラナ 50 町歩という土地は日本の一戸当り農地平均 8 反 4 畝に比べたら広い土地です。勿論本格的な經營をやるには少くとも一戸当り 3 ロツテは必要だと思えますが、先ずこの 1 ロツテで基礎固めをすることが肝要です。それには全体的に見た場合、國民經濟の發展段階に即応した産業を選ぶべきであると同時に、個々の經營に当っても奥地農業の大面积に即応した營農方法を選ぶべきだと思えます。短期の間作作物は飽く迄も間作であり副業であります。本来は永年作物や或は將來の牧畜にあるはずです。目先のことにとらわれて副業を本業にするような經營をやると、余程の手腕と条件に恵まれない限り必ず失敗します。營農の本筋から真面目にやって行きさえすれば、この國では農業によって無限の富を追求することができます。しかしコロニアでは、エンカルナシオンやアスンシオンに出て、サラリー生活にあこがれる男女も多いようです。自分のチャクラに 5 年精出した場合の財産と安月給のサラリーマンが 5 年間、粒々辛苦して貯金した金額を考えてみて下さい。全く雲泥の差があるはずで

す。安月給から下宿代や被服費や諸雑費を差引いたら、どれほどのお金が残るか子供でも計算できます。給料生活というものは、はたの見る程楽なものではありません。雨の日も風の日も酷熱の日も、体の加減の悪い日も家族に病人のある日も、夫婦喧嘩して朝から面白くない日も、自分の勤務評定と人員管理の場合を考えて無理して出勤して、組織の一コマとして働いているのが一般の給料生活者の実態です。

しかし自由人としての自営農の場合は、このような精神的、肉体的の無理をする必要はないはずで。

従って日給とりと自営農の勤務評定を比較する一つの目安は、それぞれ1年365日の中、何日働けば人並にオマンマが食えるか、ということにあります。勿論労働の内容は違います。私の申し上げたいことは、組織に縛られた給料生活者と自己の信ずるままに自由な経営のできる自営農と比べた場合、長い目でみてどちらが張り合いがあり、将来性があるかということです。要するに、パラグエイの自営移住者は入植当初数年の間は苦しい生活がつづきますが、一生懸命働いて営農が軌道に乗ってくれば、決して貧しいこともつらいこともないはずで。私は自営農こそは、この国におけるほんとうの産業人であり、偉大な企業家であると信じています。家長はもとより、セニョーラも若い青年男女も、自由人たる自営農としての誇りと自信を以て、堂々と胸を張って歩いて下さいと叫びたい所です。

(本稿は、1月27日のチャベス青年団の懇談会に於ける私の話に若干の加筆をしたものです。)

(9) すかし屁物語

すかし屁とは、字引を引くまでもなく音のしないおならのことです。おならには本来音のしないのがありますが、人体の或部分の括約筋を調節して技術的に音を立てない方法もあります。この技術は男性より女性の方が、とりわけ未婚のセニョリータ達の方がすぐれているようです。その理由は私には分かりません。終戦後数年、私は京都に住んで毎日大阪との間を満員電車で往復していました。食糧難の時代で都会の人達はみんなサツマ芋ばかり食べていた頃です。食べ物のせいか、電車の中ではあちらこちらから昔もなく濃厚なガスのにおいがただよって参ります。みんなサツマ芋系統のそれです。私はサツマ芋の本場である鹿児島県の田舎に生まれ、そこで育ったのでこのすかし屁のにおいには却って淡い郷愁とほろにがいなつかしさを感しました。そのうちそれぞれのにおいにより原料であるサツマ芋の種類まで分るようにな

りました。

その頃の鼻の訓練が役立って今でもコロニアの婦人会などに行くと、たくましいオカーチャン達の座席の間からそこはかとなくただよって来るガスのおいの原料が分るような気がします。これはマンジョカ、これはゴボウ、これはジャガ芋、これは豆類といったぐあいです。

話はさておき、どこの社会、どこの職場でもいろんなにおいのする幾人かのすかし屁型の人がいるものです。移住地内でも同じことだと思えます。一例を申しますと、いつも口の中で文句ばかり言って、よを見て何が楽しくてうまいゼニ儲けはないかと思案している人がそうです。

即ち、よその花だけが綺麗に見える人です。そしてこちらが気がついた時には、いつの間にかすかし屁みたいに退耕していなくなっています。こういう音なしの構えには私達の方でも迷惑します。先づ土地の問題です。移住会社の土地分譲契約書には分割払いの場合は、最後の支払いがすむ迄は土地を転売してはならないことになっています。

従って、今後の地券発給の場合には無断でその土地を買った人には地券を渡せないこととなります。勿論退耕した人は土地を放棄した訳ですから、2カ月たったならその土地は会社が没収することができます。買った人こそんだ迷惑です。今一つは私の方との債権債務の整理の問題です。これにはいろんな面倒なことが起こりますが、その人が黙って退耕してどこに行かれようと調べたらすぐわかる訳です。そこで責任はどこまでも着いてまわります。私はいつかこの新聞紙上で移住地は監獄ではないからことと次第によっては退耕も止むを得ない、との意味のことを申し上げました。或場合にはむしろ退耕した方がその人の将来の幸福になると見受けられる例もあります。それで、どうしても退耕しなければならない人は、すかし屁みたいにあとに変なにおいだけ残して黙って去らないで、移住会社に率直に相談して下さい。そこでお互に納得の行くまで話し会って、世間のきまりをはっきりつけて人様に迷惑をかけないように、立派に始末をつけて置くことが何より肝心なこと

です。決して悪いようにはしないつもりです。昔から、5人寄れば文珠の智慧ということがあります。目先のお金儲けをおせって、一人だけで或いは家族内だけでくよくよ考えて迷うのはつまづきのもとです。パラグエイの昔ながらの田舎道を見て下さい。道があるから人が通るのではなく、人が通るから自然とそこに道が出来上ったというのがほんとの姿でしょう。道路というもののそもそもの始りは、そうしたもんだったと思います。開拓ということもこれとよく似ています。充分の資金があるから開墾が進むのではなく、開墾して営農に精励するからおのずから資金も出来てくると考えるべきです。専門の経済学者に聞くまでもなく、いつの世でも原始的資本蓄積とはそうしたもんです。たとえ携行資金や稼働力に乏しくてもこの世では、働きさえすればそれなりに成功する見通しは確実だと思います。このことは私が百の理屈を並べるよりも、コロニア辺の身近な所にいくらかでも実例があるはずで

(10) 土俵の外で相撲をとる話

私の使っている字引によりますと、相撲とは「土俵の上で勝負を争う競技」となっています。ところがコロニアの現実を見ますと、時々土俵の外で相撲をとったり、相撲に唐手やプロレスの手を用いたりしているのではないかとおもわれるふしがあります。明らかに反則であります。本当の相撲なら先に土俵外に足をふみ出した方が負けにきまっていますが、コロニアの場合は中々そうはいかないようです。相手が土俵外に出た場合、自分だけ上品に構えてルールを守っていると逆にネット裏や、外野席ともいうべき土俵外の見物人から判定負けを宣告される恐れがあります。従って相手次第ではいやでも土俵外で勝負を決せざるを得ないということになります。つまりコロニアのめごとの場合はややもすると利害を超越した感情の私闘に陥り易いので問題が難しくなります。

そろそろ各単協の定期総会も近づいて参りました。昨年私が出席した総会の中には目茶苦茶な反則や興業価値のない土俵外の相撲があったと思います。その原因も私はよく知っていますが、過去のことはいいますまい。なぜこの

ようなことが行われるのか幾多の原因があると思いますが、紙幅の関係もあるのでその内の若干の問題を取り上げてみましょう。第一は相手の人格を尊重しつつ話合でもめごとを解決してゆくという、民主主義のルールと自覚が欠けていることにあるように見受けられます。どんな正しい意見でも筋道を立てて話し合っ相手にもみこませ、理解させなければ意味はありません。自分の考えだけが正しく、而も組合経営の特効薬だと信じ切っている人がいますが、それもどうかと思われます。仮りにそれが良薬であるとしても、良薬は口ににがいというのは昔の話です。良薬であればこそ、相手にのみ込んでもらわなければなりませんから、時と場合により自分の意見をオブラートに包んだり、糖衣錠にしたり、カプセルに入れたりして飲みやすくしてやらなければなりません。農業協同組合は飽く迄も経済団体であり、与党、野党が政権を奪い合う政治家の世界とは違います。従って、総会であげ足通りのいたい放題のごたごたを並べていては、泥り言葉に買い言葉で土俵外の泥試合になってしまいます。第二は数多い組合員の中には何百年か昔の戦国時代さながらの、古い型の一騎討ち思想の持主がいることです。織田信長が、鉄砲隊を組織して集団戦法を採用して以来、日本でも一騎討ちの時代は去りました。組合というのは組合員が組織した集団社会です。集団社会は組織で動く世界であり一騎討ちは通用しません。勿論、一騎討ち思想の持主の中には、人格手腕共にすぐれ、独立した企業家として成功する素質を持った人もいます。

組合という集団社会の組織で、規制できないこの一騎討ち思想の持主の言動は、組合や総会を混乱せしめ、ややもすると土俵外の相撲を誘発します。こういう特殊な型の方は、自ら組織を脱退して独立独歩の道を切り開いて行く方が組合のためにも、本人のためにもプラスではないかと思われます。さもなければ、いつかは組合を除名される運命にある人だと思受けられます。第三は、私みたいなエンカルナシオンにおける組合の部外者が真相をつかまないうで、自分達の感情や利害関係から或は一部の組合ボスの政治的な甘言に

あやつられて、組合内のもめごとに深入りしないことです。これをやると組合内部は混乱し、血を血で洗うような激しい土俵外の相模が始まります。どこの家庭でも、時には夫婦喧嘩や、親子喧嘩や、兄弟喧嘩や、或は嫁と姑や小姑とのいざこざが起こります。これはよそ様の家庭内の問題であり、出来るだけ他人が干渉しないのが世間の常識です。組合内の散発的な小ぜり合や喧嘩とに第三者が余り神経質にならないことです。少々のことは組合員の腹ごなしにもなるし、また精神衛生上の見地から言っても平素の欲求不満を解消させる場でもあります。移住地管理上どうしても放置できない騒ぎが起った場合は、私達も家庭裁判所の役目を果さなければなりません。しかしその場合は飽くまでも事実の誤認のないよう徹底的な調査を行い、何よりも公平を鉄則とし万人の納得する判決を用意しなければなりません。

(11) 尽 忠 報 国

去る2月11日のことです。退職軍人であった或る移住者のオヤジサンがーはいきげんできこしめしているのです。「天下泰平ですね。」と私がいいました。ところが彼は直立不動の姿勢で「今日は紀元節じゃ、貴公は忘れたか、アーン紀元節を忘れるようじゃ戦後の日本人はタルンでおる。天皇陛下に申し訳ないことじゃ、ナッチョラン。」と気合いを入れられました。全くボカンです。紀元節を忘れていても戦前派の私は天皇陛下と女性には至って弱い方なので、苦笑しながら、この酒好きの好人物のオヤジさんを怒らせないように努めました。「近く3月11日は陸軍記念日で、4月29日は天長節だ。その時はーパイやろう。」といいました。とたんに彼はきげんを直し、「そうじゃ、貴公はやっぱり日本人じゃ、パラグエイ開拓は尽忠報国の精神でやらにゃいかん。大日本帝国万才!!」と酔眼を更に細くして喜こんでくれました。全くパラグエイ移住純情詩集そのものです。戦争は遠くなりけり、久しぶりに聞くこの尽忠報国という言葉は、私にはまるで外国語のようにひびきました。思うに戦時中の大部分の軍人はみんなこの人のいい隊長殿と同じように、尽忠報国の念に燃えていたと断言してもいい過ぎではないでしょう。

しかし個々人の信念は別として、大勢のおもむくところ、国家が軍隊を持つていたのでなくて逆に軍隊が国家を持っているようなさかさまな姿になり、逆に敗戦を迎える破目になりました。同様なことが移住地でもいえるのではないかと思います。

無自覚に組合中心主義をとっていると、如何に組合会長や専務個人が尽忠報國の精神に燃え、仕事熱心であっても逆の現象があらわれて来る危険性があります。即ち、組合員が組合を持ち単協が連合会を持っているというのが本来の正常な姿であります。これが行きすぎると組合が組合員を持ち、連合会が単協を持つという逆のことが起こり兼ねない訳です。勿論組合や連合会の強化のため、又は或る問題、或る期間においては組合員全体が犠牲を忍ばねばならないことがあります。しかしその犠牲が慢性化すると、豆を煮るのに豆がらを燃料とする、のと同じような結果が起こります。組合中心主義というのは移住地管理の方法論であります。

本質論は組合員たると組合員でない人たるとを問わず、移住者全体の幸福を追求することにあります。パラグァイの集団移住地においては、管理技術の面から見てここ当分はこの組合中心主義を崩すことは許されませんが、その運営方法は時と共に変わって行くべきものだと思っています。

また移住地にかぎり、そのものと組合中心主義とを混同してはいけないと思います。組合は飽く迄も組合員の経済生活の向上を目的とする経済団体です。村造りの一環としての教育や治安や道路管理等の公共的な行政事項は、本来組合とは別なものです。これらは組合と同心円の存在でもなく、また組合という円内にある小さな円でもないはずで、それは組合という円と交わる別な円です。この二つの円の交わっている面積だけをみて、組合本位に物事を処理しようとする、必ず無理が来ます。ヤヤコしい理屈を並べるより、組合員でない方の多いチャベスや富士組合の学校問題、ポリシャ問題、道路管理問題等を考えたら私のいわんとする処は実証的にはっきりするはずで、入植の初発期に組合の外に公共的な行政事項を取扱う委員会が乱立す

ると、ものが混乱するし同時にコロニアの経済力も貧しいので、一応組合一本にしぼってやむをえず何もかもやっているというのが現実の姿だと思います。しかしコロニアの発展と共に性格の異なるものは自ら分化していくのが筋道だと思います。パラグアイの農協の本質的な特徴として、日本の農協と町役場の両方が統合されて一本化されていることにあると説く人があります。しかし私はこの素朴な見解に無条件に賛成する訳には参りません。やむを得ずやっている仕事と当然の仕事とを混同しないことです。組合が漸次的に本来の経済団体に帰れば組合の行政面の経費負担も軽くなるし、同時に行政的な事項で組合と意見が合わずに組合を離れた方にも、再び組合員として協力していける道がひらけて来るのではないかと思います。

(12) 移住地における人間の条件

子供でも知っていることですが、カイコは自分の口から糸を吐いてマユを作り自らその中にとじこもってサナギになります。マユの中は全く自分だけの世界です。世の中にはこのサナギみたいな人もいます。即ち自分だけの経験と知識、ことばを替えていえば自分の背丈だけの独自の世界を作りあげてその中にたてこもり、しかもこの狭い自分の世界だけが絶対に正しいのだと信じ込んでいる人がそうです。このような一人よがりな世の中のことを律せられたらたまったものではありません。こういう人は地球は自分を軸にして回り、社会は自分を中心にして動いているのだと信じ切っているのではないかと思います。数多い人の中には現実にこんな人もいますので、はたの者は迷惑します。私自身は勿論のこと、移住会社エンカルナシオン事業所としてもこんなマユの中のサナギみたいな考え方はしたくないと思っております。私は貝になりたいという映画がありましたが、私はマユの中のサナギにはなりたくないといいたいところです。これでは世の中の進化の原則に反することになります。私達の物の見方や考え方や実践の仕方は、移住地の発展と共に進化してゆかなければならないはずで、また逆のことも言えます。お互いが移住地で経験を積み知識もふえて人間的な成長をしてゆくとにより、移住地の発展も促進されてゆくのだということです。ところが移住地のサムライの中にはいつも興奮状態に

あって、退屈もしないで固定した自説を主張しつづけている方もあります。その必勝の信念は見上げたものですが、内容は余りいただけません。

即ち一昨年も昨年も今年も会えばいつもおなじ話題ばかりで、語調も手ぶりも身ぶりも全く同じという人がいます。誇張したい方をすれば、途中の咳ばらいの箇所まで全く同じだと断言してもよいでしょう。強いて話の内容で変わった点を探せば、悪口の対象になっている人間の固有名詞が時々入れかわるぐらいのものです。始めて聞く人は面白いかも分かりませんが、二年も三年も同じ話ばかり聞かされていると全くうんざりして、もう沢山ですといいたくなります。バラグエイ移住地の大人向の童話だと思ってはみるものの、実際のところカチカチ山や花咲か爺やコブトリ爺さんの話の方がどれ程面白いかわかりません。その内容の要素は、「ムシロ旗を立てる話、バラグエイに骨をうずめること、権威筋から賜った有難い言葉の伝達」等にまわっています。はっきりいうと余り話題の豊富な方ではないように見受けられます。ムシロ旗大いに結構です。

何時でも立ててもらいたいと思います。但し、バラグエイにはムシロがないから、麻袋旗と訂正して頂く必要があります。骨をうずめるのもほとんどの移住者がそう思って来ているのですから、敢えて自分だけのことみたいに騒ぐこともありません。昔から人生至るところ青山あり、といえますから、自分の骨だけを話題にする必要はないでしょう。骨は遺族が宗教的な観点から大事にするものであって、生きている本人が自分の骨を宣伝や売り物にするのは、おかしいと思います。

お釈迦様やキリスト様の骨なら宗教の営業政策上商品価値もありましょうが、私達庶民の骨では世間様が高く評価してくれそうにもありません。権威筋の固有名詞を30分の話の内に10回も15回も出したり、話の接頭語にするのも余り感心しません。当の御本人が聞いたら迷惑千万といわれるかも知れません。ドスをきかせたつもりかも知れませんが、演出効果からいえ

ば逆効果です。若し私に「天皇陛下はこうおっしゃった。」といわれても、「そうですか。」と申し上げる外に返事のしようがありません。

各組合の総会も近づきました。私も全部の総会に出席させて頂くつもりですが、年々才々同じ議論だけでなく、移住地の現状に即した建設的な新しいアイデアを聞かせてもらいたいものです。

総会が演出のうまい人の独り舞台になったり、声の大きい人が勝を制するようでは寂しい話です。

以上にて、帰国のため「移住地の論理と現実」は打切となりました。

以上



LIF